フランス人医師が見た明治初期の日本
私立新潟病院初代外国人医学教師ヴィダルの旅行記「新潟から江戸へ（日本）」

須長泰一

はじめに

明治六年六月、新潟に設立された医学校併設の私立新潟病院（以降は新潟病院と記す）では、西洋医学の導入のため、外国人医学教師の招聘が計られ、フランス人医師のJ・P・I・ヴィダルが初代外国人医学教師として着任した。新潟大学医学部の前身にあたる新潟病院は、明治初期に各地で設立された医学校の中でも特徴的な存在と位置付けられるが[1]、ヴィダルは創設期の新潟病院に約一年間勤務し、医学教育及び診療活動を展開した。翌七年五月には、新潟病院での任期を満了し、次の任地である群馬県富岡に所在する官営富岡製糸場へと旅立ち、新潟の地を離れている。

新潟病院では、後任のオランダ人医師ヘーデン、ホルテルマン、フォックらに、ヴィダルの仕事は引き継がれ、近代的医学教育の基礎が確立されているが、これまで新潟病院におけるヴィダルの活動はヘーデンらオランダ人医師の実績に比べると、比較的注目される機会が少なかった[2]。こうした背景には、白井院長を中心とした新潟病院スタッフが、長崎でオランダ人医師ボードイン、マンスフェルトらに薫陶を受けた人々であり、オランダ医学の基礎を背景として、フランス人医師ヴィダルの医学教育と病院の運営方針との間で若干のずれが生じていた結果と考えられる。

日仏交流史の観点から、これまで筆者は富岡製糸場に関係したフランス人技術団の活動を追求してきたが[3]、その過程で医師ヴィダルの存在に注目し、さらにヴィダルが日本滞在時の記録をフランスの学会で発表している事実を確認した。その中にはヴィダルが新潟病院に赴任する際の旅行記「江戸から新潟への旅（日本）」と新潟病院を離れ、富岡製糸場を経て東京に到着するまでの旅行記「新潟から江戸へ（日本）」も含まれていることが把握できたため、現在はその訳出を行い、これらの紹介を試みてきている[4]。

ところで、明治初年においては、東京や横浜などの都市部と富士山や日光のような特定観光地域を除いて、外国人が日本国内を旅行することは、かなりの制約があり、特に内陸地域の旅の記録は例が少なく[5]、また医師の視点からヴィダルが言及した様々な事象は極めて貴重な歴史的証言と言うことができる。さらに、本稿で取り上げるヴィダルの新潟を離れる旅は、新潟から新発田を経由し会津若松、さらに日光から富岡へと向かう経路で、ほとんど外国人が足を踏み入れていない地域であり、その記録にはヴィダルが目にした日常的な事象だけでなく、各地で実施した診療記録や鉱山における医学的観察等も含まれていて、単に歴史学や民俗学分野に止まら

ず、医史学的な観点での資料価値も少なくないと考えられる。

そこで、本稿はヴィダルの旅行記「新潟から江戸へ（日本）」から、明治七年にフランス人医師ヴィダルが見た日本を紹介してみたいと思う。

一、ヴィダルの経歴とトゥールーズ物理学・自然科学学会

ジャン・ポール・イシドール・ヴィダル（Jean Paul Isidore Vidal）は、一八三〇年二月二十一日にフランス南部のラングドック＝ルション地方オード県サル・シュール・レルス村に生まれた。一八四八年にリール市で外科の研修を受け、一八五三年にモンペリエ大学医学部で博士号を取得した。その後、フランス陸軍に入隊し、軍医としてベトナムやアフリカなどの植民地に勤務した後、一八六七年、陸軍大尉で退役した。

現在確認できている来日以前のヴィダルの動向は、一八七二年に中国・上海に在住していた事実が判明している。明治五年（一八七二）七月十七日に、アメリカ船で来日したことが確認されており、横浜居留地二十番Cに身を落ち着けて、日本での活動を開始したことが知られている。[6]

明治六年（一八七三）一月一日から、林欽次（正十郎）により、東京・芝愛宕町に設立されたフランス語と農学を専門とする迎曦塾にフランス語教師として勤務している。[7] 迎曦塾でのヴィダルの勤務状況を推測させるものとして、次のような資料が存在する。[8]

「診察候者ヨリ謝金并ニ配家料」月給

これはヴィダルが語学教師だけでなく、本来の職業である医師として、診療にもあたっていた可能性を考えさせるものである。

明治六年五月、横浜で新潟町戸長の鈴木長蔵から新たに設立される医学校併設の病院の医学教師への就任要請を受け、翌六月に初代の外国人医学教師として赴任した。[9] 新潟病院でヴィダルは人身究理学の講義を担当したことが、次の資料から解る。

新潟病院学校校則

第十六条　講義進歩シテ一篇ヲ終ツルトキハ小試問ヲ布シ、一科ヲ終ルトキハ大試問ヲ布シ、等級黜陟ヲ可致事

学科序目

一、語学・数学・究理学等ノ如キ小学科目ハ、英学校ニ於テ為学候事、

一、解剖学（午前二時間）　医官講義

一、人身究理学（午後二時間）　教師講義

右ノ他、順序ヲ追テ終ニ内外科及ヒ雑科ニ及事、

一、終科ノ年限ハ講義ノ粗密ニ関スルモノナレハ、予メ之ヲ限ルアタハスト雖トモ、凡六ケ月ヲ以テ、一科ヲ終ルト定メ、解剖以上三年ヲ期スヘシ、

右之通相定候事、

明治六年十月　　院長
（県立新潟図書館所蔵「稿本新潟県史」政治部学校一）

ヴィダルは創設期にある新潟病院の教育面における基盤確立に大きな役割を果たし、明治七年（一八七四）五月まで勤務した。五月十日、多くの人達に送られて、新潟の地を離れて、次の赴任地である富岡には五月二十四日に到着したが、F・E・マイエの後任医師としての正式な富岡製糸場着任準備のため、翌日には東京へと向かっている。富岡製糸場には明治八年（一八七五）十二月まで勤務したが、首長ポール・ブリュウナの退任に伴い、その職を辞している[10]。

富岡を離れた後は、横浜のフランス公使館付医師を務めていたが、明治九年（一八七六）二月からは、横須賀造船所の医師であるP・A・L・サバチェの後任として、明治十一年（一八七八）四月まで勤務したことが『横須賀海軍船廠史』に記録されている[11]。

横須賀造船所を離れた後は、フランスに帰国し、一時郷里で開業をしたが、やがてマゼールに移り、一八九六年一月一日に死去したと伝えられている[12]。

なお、ヴィダルが「新潟から江戸へ（日本）」を発表したトゥールーズ物理学・自然科学学会は[13]一八七二年四月二十四日に創立された自然科学系の学会で、会長はギュタール医学博士で、会員は医師・科学者・学生などを中心に構成されていた。

ヴィダルはこの学会へ創立当初から参加していて、一八七二年には上海、一八七三年には横浜からの通信会員として、その名が掲載されている。

トゥールーズ物理学・自然科学学会でのヴィダルの活動は同学会会報により詳細の把握ができるが、一八七二・七三年号においては、「小旅行―横浜周辺の温泉（日本）[14]」と「江戸から新潟への旅（日本）[15]」の報告文と七三年の四月二十一日付と五月四日付の書簡が掲載されている。一八七四年号には、本稿で紹介する「新潟から江戸へ（日本）[16]」が存在し、一八七五・七六年号には、「踏査―日本の浅間火山と草津・川原・上磯部鉱泉[17]」、一八七七年号には、「日本の植物誌[18]」が掲載されていることから、ヴィダルが通信会員としてフランスと頻繁なやりとりをしていたことが解り、現在、富岡製糸場時代にフランスから送られてきた手紙の存在が知られているが[19]、これもヴィダルのこうした研究活動の一端を示すものと考えられる。

なお、ヴィダルの出身地オード県サル・シュール・レルス村とトゥールーズ市とは隣県にあたり、約四十キロメートルしか離れていない位置関係にあり、ヴィダルが同地に学問上の交流関係を持っていた可能性が高く、トゥールーズ物理学・自然科学学会への加入はこうしたことを背景としたものと考えられる。

二、ヴィダルの旅の概要

新潟病院を退任して、次の任地である富岡製糸場へ向かうヴィダルの旅行記「新潟から江戸へ（日本）」については、これまではその一部が知られているだけで、正確な旅の実施時期・通過経路・さらに記述内容と不明な点が多く、全容の把握が課題となっていた。

今回、その全文を確認することができたので、訳出を進めてきたが、全八十五ページにも及ぶ長文であることから、まず、その特色と概要をまとめてみたいと思う。

ヴィダルの旅は明治七年五月十日に開始され、新潟病院関係者から盛大な見送りを受けて出発し、信濃川から小河川を経由し、新発田まで舟を利用している。新発田からは徒歩による旅で会津若松へと向かうが、その途中では赤谷周辺の炭鉱や三川銅山を訪問している。そして三川銅山まではパリ外国宣教会のエヴラール宣教師が同行している[20]。会津若松からは白河へと向かっているが、その途中で東山温泉や石ヶ森金山を訪れている。白河からは奥州街道を進み、日光訪問のため、大田原から今市への道に従っている。日光からは日光例幣使街道を進み、鹿沼からは人力車を利用して玉村まで向かい、玉村からは直接富岡へと向かっている。富岡製糸場到着後には、下仁田に所在する中小坂鉄山を訪問しているが、また再び富岡へと戻り、翌日には正式契約のため、中山道経由で東京に向かい、五月二十六日に旅を終えている。

ヴィダルは時間的経過とともに、新潟・沼垂・松崎・新発田・五十公野・山内・赤谷・綱木・新谷・三川・津川・野村・八木山・福取・八ッ田・宝川・白坂・下野尻・上野尻・野沢・塔寺・坂下・高久・会津若松・石ヶ森・赤井・赤津・福良・三代・勢至堂・牧之内・板屋・白河・白坂・芦野・越堀・鍋掛・大田原・矢板・玉生・船生・今市・日光・板橋・鹿沼・栃木・富田・佐野・簗田・太田・木崎・境・五料・玉村・吉井・新町・富岡・下仁田・本庄・深谷・熊谷・鴻巣などの地名と見聞きしたものを詳細に記述していて、ヴィダルがこの旅を実施する前から、学会への報告を目的として、かなり入念に準備していたことが推測できる。

ヴィダルの記述は多方面に及んでいるが、本報告では特に訪問したいくつかの鉱山の概況やそこでの健康面における影響、東山温泉の概要とその成分等について強い関心を示していて、かなり詳細な観察を行なっていることは特筆される事実である。またヴィダルはいくつかの宿泊地等で診察を依頼されているが、こうした出来事についても詳細に記述している。こうした記録は医史学上でも資料価値を有するものと考えられる。

三、「新潟から江戸へ（日本）」について

本文中に現れる地名等について、二回目以降は特別な場合を除いて、漢字のみで記すこととした。なお（ ）は訳者が、［ ］はヴィダル自身が付けたものである。

（訳文）

新潟から江戸へ（日本）

J・ヴィダル博士
通信会員

I

出発　水上の旅　川の風景　日没　エヴラール神父　水門での失敗　山の麓で　山内の谷　竹

昨年五月、私は日本政府から任命されて、エチゴ（越後）地方の中心であるニイガタ（新潟）町に設立される医学校に赴任した。このポストに就くために、非常に興味深い地方を通過した。さらにヨーロッパ人にはほとんど知れていない日本国内を通行することの許可は極めて稀なことであった。時間と距離を隔てているが、常に愛情を保っている私の家族と友人にこの国への思いを伝える目的から、私は旅行報告の要約を書くつもりであった。

単純な旅の印象から書かれた文章はほかの人々にも興味を引くものと思われ、それらを送ったトゥールーズ物理学・自然科学学会では、報告[21]を好意的に受け入れて、編集委員会へと送った。この歓迎は旅行者を気軽にさせて、そして最初の報告をもう一度という希望から、新潟から江戸への帰任の旅で二度目の報告を書き始めたが、私が望んだのは昨年通行したものとは完全に別の経路をとることであった。

私が新潟で果たした使命は政府当局と私を補佐した日本人医師たちの満足を終らせることになった。後者はナガサキ（長崎）において、オランダ人医師の下で医学を修め、一年間、私の診療と講義の手助けをしたので、病院を実践へと導くことができ、医療技術の初歩を学びに来た三十人の学生に適した教育をすることができると考えていた。私の考えでは、それは可能と言うにはほど遠いが、また政府が決定したことなので、もはや私の問題ではなかった。私に与えられているのは、二つの新しい使命への選択しかなかった。それは隣接する地域の中心地であるアキタ（秋田）町へ行き、いわゆる医学校創立のため、同様の仕事を再び始めるか、江戸の北西三十リュウ[22]にある重要なトミオカ（富岡）工場の保健衛生指導の仕事をすることである。いくらかのためらいの後、私は後者のポストに就くことを決めたが、これに対して新しい仕事（秋田）へ赴任することには、かなり激しい興味があり、特に博物学について、多くのテーマを秋田で見つける確信があり、私の意志は新潟から六十リュウ以上北で同じ沿岸にあるこの土地への移住にも傾いた。しかし、そこで私は確実にかなり負担のある仕事を担う唯一のヨーロッパ人で、外国貿易に開かれた港からの輸送と通信が困難なことから、完全に日本式の生活が強いられることになり、また幸運にして、荷物を受け取ったとしても、それは長い時間を経ることになる。こうした状況は少なくとも二年間は続くことになるから、医療の点から見て、その重要度は高くないが、江戸から相対的にあまり離れていないという優位性と工場のフランス人首長とよ

り良い関係になる確信があり、どちらかというと、富岡のポストを受け入れることにした。

五月初めから、出発の準備を始めた。町の住民と特に五、六人のヨーロッパ人居住者が[23]、私も考えていないような非常な哀惜を表わすのが解った。それは最後に私に会いたいということであった。町長は私の出発に送別会を開き、そして短期滞在の日本人写真家を見つけて、記念写真を撮るように命じた[24]。私の旅は何の障害にも出合わなかったので、旅の途中速達で送られてきた。要するに、良い人間を雇ったということである。自分としては苦しい仕事とほとんど完全な孤独であったが、ほかでは見つけられない穏やかで平穏な一年を過ごしたこの町を離れることを残念に思った。その上、純粋に仕事へ専念し、私の指導で確立し、発展したこの学校を見ると、私自身のように思われた。私が隆盛へと道をつけたが、私の出発後の運命はどうであろうか？　私は千四百人を越える患者と三十人以上の生徒の面倒をみてきたが、未熟な日本人医師の手で彼らの将来はどうになるだろうか？　ついに出発の日となった。新潟を離れたのは五月十日午後二時で、シナノ（信濃）川から小さな水の流れで平野を通って、真直ぐ東の山の方へ向かった。出発の時には最後の満足が待っていた。小舟に足を乗せた時、まわりには医師、生徒、職員の全員がそろっているのが解った。別れと旅の安寧を告げに半リュウの道を来て、彼ら全てはそこにいた。こうしたことは私を喜ばせ、またそれ以上に日本では一般的ではないと断言できるこうしたやり方に驚かされたが、さらに全く予期していたことではなかった。

結局、私は最も良い条件の中で新潟を去ることになった。天気は素晴らしく、そして私は気品のある宣教師の一人であるエヴラール神父が旅の同行者となる幸運を得たが、彼は旅の最初の宿泊地まで同行することを強く望んだ。新潟地方をすでに踏破して熟知しているこの立派な聖職者は七年間の超人的な仕事の後、日本語の会話と書取りの先生となり、私にとってどんなに有益な人物であったかを述べる機会はほとんどなかった。私の任務には二艘の小舟が充てられた。私は旅の同行者と一艘目に身を落ち着かせ、二艘目には二人の使用人と荷物と小さな小屋も積み込まれたが、それには数年来、中国と日本において私の忠実な同行者であった若い猟犬と年老いた雌猫がいた。通訳と秘書について言えば、おそらく慣例的な奉納酒を奉げる時間がなかったので、その日は別々に旅をする許可を私に求めていた。

信濃川を通過するには十五分もかからなかった。新潟の正面で信濃川の右岸に位地するトナリ（沼垂？）[25]という大きな村の北の岬を迂回し、我々はアカノガワ（阿賀野川）に通じる大きな運河に進入した。阿賀野川は信濃川の東側を平行に流れていて、そして少し北で海に流れ込む。一時間十五分の航行の後、我々は三里を進み、そしてマツガサキ（松崎）村[26]の正面で阿賀野川に到達した。この村は沿岸の砂丘に半分隠れた貧しい漁民の小屋でしか構成されておらず、緑も木も水

の澄む小川もなく、日本の村々にある快い普通の外観は全くなかった。黒い網が日に乾かされ、櫂と縄が地面を覆っていて、それが全てであった。この魅力のない光景の前をかなり早く進み、阿賀野川をわずかな時間の遡った後、我々は東の山の方へまっすぐ向かう小さな運河（新新発田川？）に進入した。この時、船頭は我々に良い情報を与えた。それは雪解けで水位が高いことから、宿泊することになるシバタ（新発田）町[27]まで到達することができるということであった。普通、舟はこの町の二リュウ離れた所までしか行くことができない。そして二リュウを歩かなければならないのである。だから翌日出発し、歩くことになる距離を稼いだのと同じことになる。この小さな川での航行は静かで楽しいものであり、水は透明で、土手は青々していて、この時期は春の花々の多彩な色彩で華やいでいた。私は時々いくつかを押葉標本として摘むために止まった。それはスミレと多量のゴマノハグサであった。前者はいくつかの種で紫から白の多様な色彩に富むものであり、あるものは細長い披針形の葉であり、またあるものは丸い葉であった。所々に、小さな二種のゴマノハグサが非常に多量にあり、本物のような絨毯を形成している。ある花はバラ色で、またある花は白色をしていた。我々の小舟はお茶を飲む目的で小さな集落にしばらく止まった。私は地面に足をつけ、家のまわりで足の痺れを直す機会を得た。この小さな集落は文字通り多くの緑に囲まれていて、木は囲みの生垣を形成し、今、そのいくつかは多くの花をつけていた。私は大急ぎでその中の小さな一つを無造作に取った。これら種類の中の多くは、少なくとも植物学的観点から私は知らないものであったが、優雅な鋸歯状の小さな葉をもつ綺麗なカエデと特別なイボノキがあるのは解った。さらに美しいものがある庭の中に入り、真剣に花を摘んでいる我々の動作を農民は無視することがなかった。私はそれら植物の日本名を尋ねたが、彼らはわずかな数の名前しか答えることができなかった。そこですぐに考え直して、しばらく待って、植物の名前をよく知っている人物を探した。実際、すぐ後で、私はあらゆる植物の名を知る白髪の老人と向き合っていた。村人達は明らかに古老の知識を非常に誇らしく思い、満足していた。

そうこうしている間に、太陽は地平線まで下がった。早く旅に戻らないと、道の途中で夜になる恐れがあり、従って、我々は舟に戻り、かなり早く水の上を滑るように進んだ。我々の前には地平線をふさぐように、東方の山脈がわずかな距離でそびえ立っていたが、その頂上はまだ雪に覆われていた。すぐに最も高い頂上に日は沈み、低い部分を暗闇にさせた。景色が本当に素晴らしくなる時であった。雪の頂が銀色の反映を投げかけているのに対して、この輝きを保つのは難しいことで、森の茂みと深い峡谷は暗闇を作りだしていた。それは山の斜面を淡い青で染めるのを目立たせていた。エヴラール神父と私はあまりに並外れた光の印象を見入るのに厭きることはなかった。そして我々はついに同じ考えを持つに至った。それはもし風景画家が穏和であまりに現実的な印象の再

現を試みても、想像力による非論理的とまで非難されることになるのはほぼ確実であろう。日はついにサド（佐渡）島の山々の後に消えた。少しずつ暗闇となり、天空はどんな雲にも清らかさを変化させず、すぐに千の星の光にまみれた。山々はもうぼんやりとした暗闇でしかなく、我々の視線はたそがれ時のヴェールの背後に現われた星を追いかけた。舟の操作は異様なほど乱暴になり、船頭の勢いのよい話は我々を妄想から引き離し、そして現実へと回帰させた。不安定だが、我々は全ての出口を閉じる高さ二メートルの堰の存在を見つけたが、重大なことではなかった。先へ進むためには、舟を土手の上に引っ張りあげ、堰の上の運河に再び置かなければならなかった。昼間、この操作は近所の家々の交代勤務であり、唯一の仕事は出現した堰という障害を越えることだけであったから、それほど困難なことではなかったが、我々が着いたのは遅すぎた。男達はすでに帰っていた。船頭は翌朝雑役夫が戻ってくるのを待ち、その場で夜を過ごそうと勧めているように見えた。しかし、こうした方法は全く我々の意図ではなく、どうしても通過しなければならないと言い渡した。すぐ、範を示すかのように、エヴラール神父と私は目立つ荷物を地面に置き始めた。仕事を課したと思われる我々に寛大な心から楽しそうに、男達は異様な歓喜を示して、仕事に取りかかった。彼らの眼差しからそれを理解するには、状況は異様であり、日本の慣習によれば、ある階層の人物はどんな事情でもつまらない肉体労働をすることはない。だから我々の立場にいる一人の日本人は舟底に寝そべったまま、この出来事をいつまでも待っていて、むしろ男達の手を借りることになった。我々は日本人ではないので、こうした用件に手を貸しても侮辱されることにはならないと思われた。一度、舟から全ての荷物をおろし、斜面を縦に引き揚げるのに取りかかり、土手の上を全速で実行した。我々全員の力をまとめる作業を助けるのに用意されたローラーがあり、エヴラール神父が全力で前へ引き、私が後ろを押して、堰の上で舟を運ぶことに成功した。それから、荷物をどうにかこうにか再び積み込んで、反対側に浮かんでいることに満足した。危ないところだった。運河は非常に狭く、完全に夜となったので、航行はより困難なものとなった。我々はもうゆっくりとしか進むことができなかった。我々が新発田に着いたのは夜八時半になっていた。幸運にも、我々の到着は連絡されていて、我々を待つ人々は提灯を備えていた。我々は宿泊することになる旅館へすぐに導かれた。

提供された日本の旅館についてはすでに最初の旅行記で十分な概略を示したので、特別に述べることはない。荷物が着いてから、我々は急いでゴザの上に食卓を整えさせたが、同時にテーブルと椅子も用意した。我々は空腹を感じていたので、旅の初日に体力を保つため祝宴を張った。その夜、私は旅の食糧の内でかなりの量を使った。エヴラール神父は新鮮なパンとワインとポタージュと二、三皿の料理が出るのを見て非常に驚き、そして国内旅行の際にはこのような祝宴が一

度もなかったことを明らかにした。事実、地方を旅することができた非常に珍しい経験を有する我が貧しき宣教師達は、いつも道具一式を持つことはなく、手にする傘と腕の聖書が全財産であった。日本で生きるには、彼らはどこにもある日本人の食事を構成するご飯と茶碗の水そしてベッドを形成するゴザを確保した。私はこのような貧しい食事にはほとんど慣れていないので、あまり知らない国で長旅を始めることを慎重に考え、少なくとも必要なものは備えた。そこで私は毛布と小さなマットレス、パン、ワイン、砂糖、コーヒー、油と酢、そして米のほかには何も見つけられない村の場合のため、いくらかの罐詰も運んだ。

翌五月十一日朝、我々は早朝に徒歩で出発した。天気はすばらしく、徒歩旅行の続きを始めるのに気持ち良く感じられた。しかしながら、我々は体力と脚力にはあまり自信がなかった。エヴラール神父は死の扉に導かれる長い病から回復したばかりであり、私はやむを得ず座ったままの生活の一年で、筋肉は減退し、関節は緊張させられないかと心配した。また初日は試験的に適度な行程しか走破しないことで我々の意見は一致した。その上、山の峡谷に入る前にはまだおよそ二リュウあるので、荷物をクルマ（車）と呼ばれる小さな手押し車に載せる機会を得た。

私が行った診察に対する感謝のしるしに菓子の食料をくれた旅館の主人に別れを告げた後、我々は山道に入った。心は軽く、旅行者の気ままさと学生の休暇のような満足感があった。真実、特に私にとって、この旅は一年のかなり辛い仕事の後の休暇期間を意味していた。新発田町からは山麓からわずかな距離に沿って、我々は南方へ向かった。この町はかなり重要であるが、特筆することは何もない。アクセスが非常に難しく、商取引により便利な場所である新潟町というライバルに交通を独占されている。

まず我々が通った道路は本当に美しく、水田の上を大きくそして高く車道が作られていて、そして両側には日本でこれまで見たこともないような巨大な樹齢数百年の松が配置されていた。山からとても透明な水が流れる小川が道に沿って流れ、空気は清浄で爽やかであった。太陽は枝を通してかすかに洩れる心地よい光線であり、あまりに美しい朝を満足するように味わうため、散歩をしたが、それは二人の散策者が昼食の食欲を得るため田園の空気を吸うことが目的であった。我々は山頂の雪の反射する景色を見るためにしばしば立ち止まった。絶えず我々は注意を引かれた植物を採集するために道を離れた。我々に出会った全ての農民は我々の足取りを驚いたように見て、そして我々の服装がつまらない驚きの理由ではないことを除いて、外国人は奇抜な方法の旅をすると思うに違いない。エヴラール神父は聖職者の服装をして、革袋を下げていて、それには聖書と全ての荷物が入っていた。私は奇抜な旅行の服装をし、そして日射病から身を守るため、いくつかの国でしたように、消防ヘルメットの形をした帽子を被った。しかし、白い鉄製の植物採集の大きな箱が背中で

揺れる私のおかしな身なりは日本人に強烈な印象を与えた。彼らはその変わった物がどんな使い方をするかを使用人に尋ねたが、使用人は私が新潟の医者であり、箱の中にはあらゆる病気を治す薬を作る薬草が入っていると真剣に答えた。

こんな我々の方法では、早く進むことはできず、我々がイシクノ（五十公野）村に[28]到着したのは八時半で、まだ四分の三リュウしか進んでいなかった。ヤマウチ（山内）村に[29]到達したのは十時であった。山内村は特記するような重要さはほとんどないのだが、その名が示すように［ヤマは山そしてウチは内］、山の中へ入る峡谷の入口にある。この場所から我々は山の西斜面を登り始めた。道の状態は手押し車がさらに進むことを許さなかったので、荷物は馬の背に積んだ。

だが、道はまだとても美しく、そして軽いでこぼこを除いて、ほとんど平坦であり、両側には驚くような荘厳でざらざらした松が配置されていた。にもかかわらず、いくつかの例から考えて、これら森の巨人はいつも暴風に抵抗する力はなかった。最近、風の力で引き抜かれ、道を横切って横たわり、少し離れた場所では幹の真中の高さで砕かれたこれらの巨木を見て驚かされた。この山内の谷の形状によれば、この風の強さは簡単に説明できる。それは高い山々の障壁に対してぶつかり、そして大きく開いた開口部に吹き込み、突然狭くなって大気の高波が起こった。またそれにさらされた藁葺家は竹と木の枝で作られた高い防護柵で守られていることに気づいた。

我々は間もなく谷の斜面が接近し、両側が緑の壁となる素晴らしい場所に到達した。そこでは孤立したいくつかの頂が聳え立っていた。谷の奥は背の高い大木の森に覆われていて、そこを通る蛇行した道は平坦で砂に覆われ、まるで整備された道のようであった。大木にはかなりの種類があったが、我々はその葉影を歩くことができ、その根元では花をつけた美しい茂みを形成する多量の低木に出合った。その中に、我々は特異な色をしたアザレ（ツツジ）の種類を認めたが、明らかにするのは難しいが、少しくすんだ緋色をしていた。注目すべきことは、この場所では別種を見つけることは不可能であった。日本にはあらゆる種類のアザレが存在することは知っているが、それらは山で欠かせないの茂みを形成し、そしてここでは我がカリビーの[30]山々でミントやピスタチオと同じ役割をしている。昼食の時間が来たが、始めて見た美しい植物を採集するため、不本意ながら遅れることになった。植物採集の箱は一杯になり、簡単なことであったが、いかにせよ、さらに採集し、そして我々はすぐに草一束を小脇に抱えたり、また背負ったりして、アカタニ（赤谷）村に[31]到着したのは十一時から正午の間であった。

我々が最初の家に近づいた時、一人の日本人が我々の方にやって来るのが見え、そして地面に額をつけ平伏するのが解った。それはまさしく村長であった。通訳により我々の到着が知らされていて、我々に出会うために来て、この村の賓客として迎えられた。ああ！　ここは一八六八年の内戦により

焼かれ、灰からほとんど復興していない。私が出合った始めての荒廃した村であり、これを見ると、この国の恐ろしい慣習に対して怒りと衝撃を禁じ得ず、軍隊が敗走する時、軍は背後の村々を焼き、風は日本の用兵の別働隊となり、そして火事は敵の追跡を止め、退却の確保をする手段となる。引き起こされた火事は消火されるまで全ての交通を遮断した。この粗暴な習慣は今年サガ（佐賀）地方で起こった蜂起[32]の際、ミカド（官）軍から逃げる時にも実行された。普通、火事は住民まで虐殺することはなく、村々を柱だけにするに留まる。

我々はこの貧しい村の宿屋に入り、そしてゴザの上に急いで食料を広げ、そしてかなり保障された昼食をとることができた。宿の人々は公式な推薦によって、我々に対して熱心に尽くした。しかし、彼らの配慮は冷たい水といくらかの卵を手に入れることしか成功しなかった。昼食の後すぐに、私は連れてこられた病人の診察をした。それは足が膝下まで驚くような蜂織炎に襲われた不幸な若者であり、通訳の手配の悪さと誤解から、私の道具を含むほとんどの荷物はすでに出発していて、大いに悔やんだのだが、私が手に入れることができる唯一の十分に鋭利な道具である日本カミソリによる手術を患者が拒んだため、この大きく切除するだけの簡単な手術はすることができなかった。私はいくつかの助言だけを与えたが、それに対してかなり評価の高い美しい竹の新芽（竹の子）をもらった。

この贈り物は特別なものに思われたが、日本では高価な料理であることを知らなければならない。新鮮なまま、あるいは塩漬けの種類で保存されて食される。日本にはあらゆる大きさの竹が約三十種類あるが、食用に供される竹の子は五種しかない。モーソー（孟宗）は最も太くそして価値が高い。マダケ（真竹）、オチク（男竹）、メタケ（女竹）あるいはオンナタケ（女竹）［女の竹］、そして最後に最も小さいハチク（淡竹）である。この国に多量にある種類のソウズタケ（僧都竹）とシノタケ（篠竹）は背の低いもので、食料として使われることはない。

II

山の中　炭鉱　非常に熱心な人　通訳には気をつけろ　火災　日本の動植物相　佐渡の山　サグラ[33]（三川）銅山　辛い別れ

十分に休憩した後、少し暑くなったが、我々は道の右手一リュウ半の隣接する山にある炭鉱を訪れることに決めた。新潟平野の東の山脈全体は非常に豊富な炭鉱であるが、私には調査をする時間がなかった。また石油の源泉も少なからず存在したが、住民はいくつかの場所でしか精製することができず、源泉は地表から本当に多量な石油を湧き出していた。農民は住居の近くまで、溝と竹のパイプによってそれを引き込み、米を煮ることや家庭的な使用にと無作法に使う。また一般的にほとんど鉱水化していない温泉があるが、一つは岩の表面に、おそらく硫黄の多量に白い沈殿物が付着するもので

あるが、時間がなく、この興味深い場所を訪れることができないことを非常に残念に思った。

前述の赤谷村長が我々の案内人となり、我々は最近設置された山の茂みを通るきれいな小道に従って、炭鉱の方へ向かった。我々は少しゆっくりと進み、数種類の植物を採集したが、その中にはとても美しい拍車を付けたスミレ［スミス］（ママ）の種があった。一時間の歩行の後、我々は小さな小屋に到着したが、それは掘立小屋で採掘長の住居であり、森の真中で孤立した隠者の住まいのように思われた。採掘長は先を行った案内人によって、我々の到着が知らされていて、とても誠意を込めて我々を迎えた。そして我々はしばらくその小屋で休憩をした。知性と力強さの備えた顔つきをしたその若い男は私に強い印象を与えた。私は森の中に一人でいること、特に冬の雪の中では監獄に留置されているような孤独を感じないかと言ったが、採掘長は悲しみと辛さを含んだ微笑みで、「ええ！　先生。この仕事をするためには、ここにいなければならないのです。」と答えた。しばらくしてから、私はその言葉を理解することができた。

間もなく我々は再び道をたどったが、道はさらに急になり、もうゆっくりとしか進むことはできなかった。我々はまず落盤により埋められて以来、使われなくなった採掘場に出合った。この場所から横に水平で設置された木の幹からなる段が本当の階段となり、我々は山頂に到着した。そこからは反対斜面の滑りやすい道をまた数分下らなければならなかったが、道は我々を採掘鉱山へと導き、我々の目には薮の中で完全に荒涼とした場所にある寂しい現場が写った。石炭の鉱脈を発見するには隣接する山の起伏の曲線により、深く沈み込んだと思われる平行な斜地層である地面を掻き削るだけで十分である。採掘は露天で行なわれ、露出場所はぜいぜい侵食が始まるだけで、獲得される石炭は軽い亜炭［比重一・二三］の種類であり、その断面はしばしば輝きを示していて、樹脂のようであった。どこにも設備や施設の認められないこの採掘ほど惨めなものはなく、十五人の男と藁と枝による掘立小屋しかなく、石炭で一杯になるいくつかの篭を肩の上に担ぎ、山の下まで降りた。また、その場で得られた石炭はピクル［六十キログラム］で、一テンポ[34]［約二十五サンチウム］の値しかつかないが、これに対して新潟に送られたものは、輸送の難しさから一ブ（分）［一フラン二十五サンチウム］になる。

この国の人々が言うには、大昔から、この場所に石炭があることは知っていたが、まず輸送の困難さから、誰も採掘をする発想を持たなかった。さらに実際的に、日本人は石炭を使うことがないから、今日はまだその純粋な利用は何の価値を持たないのである。しかし、昨年来、かなりの数の蒸気船が日本の様々な港へ頻繁にやって来て、そしていくつかの重要な産業施設が蒸気機関により操業を開始し、知られていた鉱脈の内、いくつかは採掘が始められた。ここは新潟からあまり離れていないので、貧しい若者がこれを利用しようと考えた。彼らは庶民ではなく、全員がサムライ（侍）という特

権階級に思われた。［軍人階級であり、唯一、二本の刀をさす権利を持つ］

一八六八年の戦争によって、北部地方のタイクン（大君）の軍人となり、大君の旗の下で戦い、敗れた。この時以来、政府から与えられていた俸禄の大部分は奪われて、彼らには無縁であった肉体労働に生活の糧を求めなければならなかった。痩せて、やつれ、ぼろを身にまとい、言わば野営生活をする彼らは同情に値する。彼らの中の数人はハコダテ（函館）の占拠[35]で負傷し、負傷者達はエヴラール神父の手当てを受けていた。[36]彼らは見覚えのある人に気づくとすぐに、急いで彼のまわりに集まり、予期せぬ再会に喜びと感謝の気持ちを表わした。一般的な日本人が感謝する気持ちの表し方を知らなかったが、今回、彼らの表現は誠実なものであると思われた。我々は私が採集する亜炭のサンプルに対する支払いという口実でいくらかのお金を取らせたが、なぜなら、彼らは貧窮ではあるが、おそらく施しなど受けようとしない非常な誇り高さをもっていたからである。

時間は進み、我々が宿泊しようと考え、そして速達書留で荷物を送ったツナギ（綱木）村[37]への道に再びついた。最初の家に達した時には、日は沈み、かなり疲れていて、喜んで夕食のもてなしを受けようとしたが、全ての私の個人的な荷物は、かなり距離の離れたアラヤ（新谷）村[38]まで行ってしまっていて、荷物を手にできない悲嘆がどんなものであったか。どうしたことか？　こんな遅い時間では、どんな輸送手段も見つけることは不可能で、空は漆黒の闇となり、逃した夕食を取り戻すために歩こうと考える余裕はもうなかった。暗い中、峡谷の断崖沿いの狭い道を馬や篭で入ることは不注意の極みであったが、思切って決心して、先へ進んだが、前を行く案内人は提灯を持った。幸運にも、天候は素晴らしく、空気は爽やかであった。そして夜の暗闇ではあったが、我々はまだその景色の美しさについて少しは説明することができる。奥を急流が渦巻き、両側が険しく狭い峡谷を進んだ。時々、岩にはねる泡を見たが、しばしばあまりに近く断崖沿いを進んだので、案内人は我々の手を引いて導かなければならなかった。

新谷村に着いたのは九時近くになっていた。私は一番の気がかりになっていた指示された村で待っていなかった使用人を厳しく叱責したが、それは彼を無視して隊列を前進させた二人の通訳のせいであった。私はそれを少し疑い、彼らを呼んで、案内の報告をさせたが、それは無駄ではなく、困ったことに、さらに隣村までかなり進んでいた。すでに前年の江戸から新潟の旅の時でも、こうした無遠慮さが私を激怒させたのであり、有難迷惑であることははっきりしていた。

日本国内を旅する外国人が体験した最も大きな困惑は同行する通訳のことである。僅かな距離を行くとすぐに、我々は彼らのおもちゃも同然である。彼らは我々の嗜好や適性に関係なく、あるがまま自由に旅をする。出合うことができる興味深い事象には何の注意も払わず、我々が通行する地方で、

鉱山、各種の産業、温泉等の注目すべき場所があるかを尋ねても無駄である。彼らが言うには、そんなものは何もないと。そして彼らは旅館にまで指示を与える。その関心はより快適な旅であり、最短距離の道、さらに彼らにとってより良い宿を決めること、つまりそれは彼らの嗜好でおもしろさを見つけられる場所で、このために彼らの方法で道順を決めた。今回で私の忍耐力も限界となり、出会って以来、耐えがたい二人の通訳[39]を解雇しようと固く決心した。エヴラール神父も私と同様に不満であり、私の決心に強く賛同し、私は使用人一人とだけで気楽な旅をすることにした。

我々が夕食を終えるか終えない内に、村の中で叫び声や異常な動きがあることが解り、我々はこの物音から情報を得るため、外へと飛び出した。しかし全く問題などはなく、隣の谷に大きな炎が立ち登り、我々は近くで火事があったことが解った。この種の出来事は日本では本当に普通のことで、もう大きな注意を払う必要はなかった。また、江戸に住んでいた時、火災で街を明るくしない夜を過ごしたことはなく、そしてしばしば同時にいくつかの火災があった。しかし、この夜、我々は緑の茂みと山の岩の真中で火災の炎により生み出された奇妙な光の印象をしばらく眺めていた。しかし、我々はかなり疲れていたので、すぐ床へと就いた。この不運な村で夜を過ごし、旅の危険が及ばないことを神に感謝したが、荷物を失うことと気の休まる時がないリスクはあった。

翌五月十二日朝、ツガワ（津川）町[40]へ荷物とともに二番目の使用人を向かわせた後、我々は隣山にある重要な銅山を訪れる目的で西方へ向かう道を離れた。新谷から急流を越えた後、しばらく右岸を進み、我々は山の険しい斜面を登り始めた。気候はかなり涼しく、我々を囲む伐採された森は地平線よりまだかなり低く、日差しを防いだ。我々は荒涼とした場所で炭を作る炭焼きにより、手斧で切り開かれた非常に狭い道に従い、ゆっくりそしてやっとの思いで進んだ。ほかには何もなく、手でかき分けなければならない本当に密な枝のせいで、我々のまわりには何も見えず、深い薮を通って進路を見出すことほど困難なことはなかった。我々は用心してこの地方を隅々まで知り尽くした老人を案内人として雇った。老人はその年齢にもかかわらず、我々の前をしっかりして軽快な足取りで歩いた。約一時間のかなり辛い登攀の後、我々は小道ほどの幅しかない絶壁の先端に到達した。左手には我々が越えてきたかなり深さのある急流が流れていた。我々が見つけた絶壁の先端は緑に覆われた巨大な壁のように立ち上がっていた。密生した低木はこの壁の内側にやっと根を下ろしていた。そして絶壁に誤って一歩を踏み出す旅行者の落下を止めるために用意されているように思われた。低木の中には多くのツツジを見ることができ、この時は美しい花が芳香を漂わせていた。右手の急斜面は非常な傾斜で、入り込めないような単調な薮に覆われていた。この時からしばらくの間、登攀の辛さはやや薄れたが、すぐに日が高くなり、我々は暑い日差しにさらされたので、清らかな水の流れの近くで一息

をつかなければならなかった。私はこの休憩を利用して、道沿いで採集したいくらかの植物標本の整理を行なったが、そのほとんどは花をつけた低木に属するもので、私の知らないものがほとんどであった。その中の一つは横浜と江戸の庭園に植えられているのを見たことがあり、越後の山中で再会することほどの楽しみはなかった。それは真種で、とても美しく逞しいものであり、また野生の状態であった。我々が登った山脈の斜面には大きな木はなかったが、二から四メートルの高さの非常に太いものだけがあり、これはこの地方で消費される多量の木炭の生産による結果であると考えられた。遠くに驚くような木が見え、それを取り囲む緑の波を壮大さで優越していた。それは樹齢百年の栗の木［クリノキ］であり、我々の進行方向にあった。私はその大きさに興味があり、地上から一メートル半の高さで、七メートルの円周があるように思われた。かなり小さな果実を実らせる種類と思われたが、はるかに大きく粗雑なものとは別種であった。

我々は登攀の最も辛い場所へと到達した。そこは全体が大きな草に覆われていて、道と思われるようなものは何も存在しない所で、我々はしばしば手を使い、枝を掴みながらよじ登らなければならなかった。我々を取り囲む植物はとても衰弱した野生のもので、さらに陰鬱な様子を示しているように思われた。またここは獰猛な動物に出合うような自然な場所であった。我々は武器を持っていなかったが、幸運にも日本には猫科の種類がいないが、俗にヤマイヌと呼ぶいわゆる［山の犬］の狼［オカミ］と黒熊［クマ］の種がいた。後者は危険な獣である。冬期に、新潟の市場でジビエ（狩猟で得られた肉）や食肉として売られている素晴らしい臑肉を見たことがあった。厚い脂肪層に覆われたそれは、一見して食欲を強くそそるものであった。日本人はそれをかなり好むが、私には凡庸な匂いが明らかで、評判以下のものと思われた。

日本のいくつかの場所で存在するねむの木［ネムノキ］と思われる非常に芳香のある大きな花をつけた美しい木を最初に認めたのもこの場所であった。まだ葉はつけていなかったが、緑の枝にきれいな花が浮かび出て、かなり強く素晴らしい印象を生み出していた。近くにはマタタビ［トロチョシガマ・ポリガマ］と呼ばれる日本で猫の病気の薬として、匂いのある樹皮が使用される木でもあった。

三時間の辛い登攀をした後の九時半に、我々はタツヤマと呼ばれる山の峠にようやく到着し、一息を入れ、そして我々のまわりに北から西へ広がる美しいパノラマを愉しむために岩塊の上に腰を下ろした。雪に覆われた高い山々が地平線を形成し、非常に起伏のある広大な平野の間は、隔てられた間隔が埋められていた。近くには、いくつかの独立峰が円錐形を際立たせ、山の噴火口からは時々驚くような目印が放出されていた。西側の光景は本当に大きく見えたが、ちょうど我々の正面には海が見えた。この距離からでは、広大なガラスの表面のように思われ、遠くは水平線のぼんやりとした色調が混ざり合い見えなくなった。このまぶしい表面の真中に不規

則な輪郭を浮かび上らせた暗い部分が認められたが、それは波の明るい背景の上に描き出され、切り立った頂上のあるサド（佐渡）島であった。この島は新潟の西十二リュウにあり、豊富な金銀鉱山により非常に注目され有名であり、日本人はすでに数世紀来、採掘している。今日、イギリス人技師[41]の指導により、蒸気機関を使った方法で、定期的な採掘が行なわれている。私が新潟に住んだ時も、頂上を輝く反映で明るくした佐渡の山々の後に日が沈み、隠れるのを見る機会が多くあった。しかし、私が見た場所での眺望は全く異なっていた広い地図に目を落とすように思われ、知っている全体に視線を送ることができた。そして一年間過ごしてきて、おそらくもう再会することのないこの地方に私は最後に一瞥を送ることを楽しんだ。

この短い休憩の後、我々は山の頂上を迂回し、西斜面を通過して、そしてすぐ後に我々の下二百メートルに採掘建物を認めるサグラ（三川）銅山の見える場所へと到達した。上空からこの施設は何か奇妙なものであることを示していた。かなり大きく広がった傾斜面にあり、その目的を想像することができないような非常に低い建物が長く配置されているのが見えた。それは蛇篭の配置で囲まれ、遮断された四面の見えるキャンプのようであった。この場所周辺はほとんど完全に伐採され、まばらな低木を通して、石の多い干からびた地面がぼんやり見えた。我々は山の西斜面の険しい小道をまたしばらく降り続けたが、それは時々岩を粗野に刻んだ階段であった。そして我々はようやく採掘場構内へと入った。まず我々に強い印象を与えたのは、鉱夫の家族が住む建物として供されて荒れ果てたあばら屋と鉱石の加工作業が行なわれる全面が囲われた粗悪な倉庫の配置しかない貧しい外観であった。この場所の全住民は我々を驚いた大きな目で眺め、男と女と子供は我々の外見にぎょっとして、その通行に不動のままでいた。彼らのほとんどはおそらく外国人を見たことがなく、いずれにせよ、我々がこの場所を訪れた最初の外国人であることは確実であった。我々の注意は休憩する場所を探すことで、そして我々は主要な建物へと導かれた。しかし、部屋が我々を受け入れることができるまでの十五分間待つことを強いられた。我々はようやく非常に清潔で、素晴らしい眺めを楽しむことができる部屋に通された。我々はやっと莚の上に座ったが、役人が我々を訪ねてきて、我々が誰か、そして我々の希望その他を尋ねた。できるだけ早く昼食をとりたいという意図をはっきりと表明したエヴラール神父の説明を納得したようで、すぐに帰っていった。我々はすぐに唯一手に入れることができた五個の卵を加えただけの乏しい食事についた。食事の間、おそらく興味を引かれて我々の周りに集まった訪問者達はその様子から採掘の若い監督と判断された。我々は彼らにいくつかの情報を求める機会を得たが、彼らは自ら進んで提供した。彼らが言うには、鉱山の労働者は子供を計算に入れず、男と女で約四百人いる。鉱山はずっと以前から、かなり活発に採掘されていた。山の側面で鉱石の抽出

が行なわれ、坑道はかなり深い竪坑への入口となる。そして我々の場所からはいくつかの入口を認めることができた。私は銅を取り扱う結果、特別な病気の存在についての関心があり、銅山の人々の衛生状態について情報を得た。事実、概して、多くの病人がいて、ある人々は長時間の仕事に耐えることができず、鉱山長も相当な病気で、数年来、仕事場に入ると重大な病気のぶり返しが起こると答えた。しかし、いくつか変化をつけた質問を繰り返しても、銅によってもたらせられた病気の特性を示すものを得ることは全くできず、唯一注目を引く不変の症状は、かなり強い咳、呼吸困難、失声症、頑固で辛い口峡炎、鼻カタル、時々起こる頭痛などがあることである。詳細な検査なしではあるが、粘膜、気管支、喉頭と咽頭、同様に鼻腔の炎症から、亜硫酸の蒸気の吸入と思うことに決めた。なぜなら、倉庫の近くを通過した時、すでに私はこのガスの強い臭いを感じていた。

我々が昼食を終えるとすぐに私に診察を求めるため、部屋に鉱山長が連れられてきた。四十五歳ぐらいの男で、痩せて病弱そうな外見をしていた。作業場に少し長くいるたびに、感じる苦痛のぶり返しのせいで、数年来、施設を十分に監督することができないことを痛切に嘆いた。歯肉が青みかかった縁取りをすること以外、何の特徴もなかったので、喉頭気管支炎や慢性口峡炎と認めることは難しかった。私は銅による病気の症状ではなく、特にこの事例は亜硫酸の吸入によるものと判断した。私は患者がたいへん満足するような治療法を指示したので、患者は私にいくつかの鉱物標本を贈り、そして我々がこの施設を詳細に訪れることを許可した。

我々は絶好の機会を得て急いだ。なぜなら、我々がこの場所へ足を踏み入れた最初のヨーロッパ人であり、日本人は少し用心する態度を示すだろうから、我々が気軽に訪れることは困難であると恐れたが、しかし、そんなことは何もなかった。その上、我々が最も興味深いことは、外国人が来たことでも、何の干渉や修正もない作業中の日本人を見たことであった。ここでの採掘は前述した人々によりもっぱら行なわれている。そして、我々は彼らの祖先が行なったのと同じものを見る。

まず、銅抽出の一連の作業について述べる。鉱石は切石にした大きな断片にして坑道に運ばれ、まず地面に座った男が大きな石の上に置かれた鉱石を金槌の一撃で割る簡単な方法により、細かく砕かれてより小さな断片にされた。我々が行く道に沿って、同様な方法により男達が石に切り込みを入れて割っているのが見えた。

第一作業の後の第二は、鉱石を洗うことで、それはひたすら女達に任されている。建物の中は長さが三十から四十メートル、幅が十から十二メートルあり、地面に差し込まれた木製の四角い大きな一続きの桶が設置されている。桶はそれぞれが繋がっていて、山の水源からのかなり早い水の流れが通過していた。女は竹の大きなふるいの種類が備え付けられた桶の前に位置して、流水の中にそれを沈め、そして力一杯ふ

るった。ほどなく細かく砕かれた鉱石がふるい一杯になり、洗われた不純物の微細な部分がもたらされ、鉱物を含まない大きな部分が表層を形成することで終る。実際、全鉱物が残ることから、ふるいに特に回転運動を伝え、女達は縁に不純物を集め、そして近くに手際よく投げ、鉱石は反対側に投げた。桶が地面すれすれにあるので、この種の仕事は極端に辛そうに見え、労働者達はふるいを沈めるために非常に身をかがめなければならず、この不快な状況で彼女達は腕の先が届く範囲で鉱石について力強く行わなければならず、この長時間業務は辛い試練で筋肉を付けることが必要となった。この難点は冷水に触れることとどろどろの地面に足を入れることを付け加えなければならない。特別な詳細として、私は彼女達全てが着ている仕事着について記録をした。それは漏斗形に作られたズボンから成り、膝の上まで下がり、そして口が広がるものであった。そしてキモノという日常的な仕度である長い服を支えるいくつかの紐によるベルトで合わされるものであった。

第三には、鉱石は洗われた後、最初の焼却に委ねられた。このために日本人は一軒の極端に長い簡素な炉列が配置された小屋を設置した。この小屋の外観ほど質素なものはなく、ほとんど四角ではないいくつかの真直ぐな脚が草と土で覆われた枝でしか構成されていない骨組みをどうにかこうにか支えていた。これはいかなる壁の形跡もなく、この屋根の下、石と土で粗野に築かれ、地面から約六十五センチメートル立ち上がる一種の枠が縦に広がっていた。この厚い枠の特別な様相は鍋の形をした直径約一メートルの円形の穴が掘り窪められていることで、それは一方に小さな刻み目による通気孔を備えていた。一種の穴の中に、乾燥した草、枝、木の床に鉱石を置き、そして火をつけて、非常に明瞭な亜硫酸の臭いを撒き散らす多量の煙を発しながら、ゆっくりと燃やした。男達は作業の進行と火の活発でゆっくりした動きを見守った。焼却が終った時、結果として黒い粉末を得られたが、二度目の焼却に委ねられることとなった。

第四には、二度目の焼却は同じ小屋の中で行なわれ、火がとても活発なことを除いて、一度目と同じ条件で特別なことは何もなかった。今回は多少薄い滓のようなものが広がる灰白色の非常に壊れやすい金属物質を生じたが、まだ銅の様相は全くなかった。

第五には、この物質はやっとかなりの高温による三度目で最後の焼却に委ねられる。この作業は土で覆われた竹と葦の土砂止めがなされた状態の悪い外壁に囲まれた特別の建物の中で行なわれた。この外壁の下には地面に掘られた円形の石に囲まれた穴があった。この上には、ある高さの大きな煙突の覆いがあり、精錬所の火のためのもので、焼却の結果による煙とガスを外へ出すために用意されていた。炉のすぐ近くには精錬所のふいごのようなものが地面に設置されていた。長方形をした木製の箱で、中には水平に動く木のピストンがあり、一人の男が絶えずこのピストンを動かして、炉に竹の

パイプを通して空気の流れを送っていた。物が準備され、二度目の焼却で得られた滓が細かく砕かれ、木と木炭を混ぜた炉の中に置かれ、最後の焼却に委ねられ、それで作業が終了したと判断される。冷却すると、穴の底には赤銅色をした二から三センチの厚さの滓が生じるのが解った。ここで行われる鉱山の作業は終わり、滓は商人に引き渡されたが、得られた銅は非常な不純物があり、その後、商売の前にまた精製されることとなる。

これらがサグラ（三川）鉱山で行われる一連の銅抽出作業の要約である。鉱石は黄銅鉱と思われ、輝いた真鋳の美しい黄色をしているが、おそらくそれは硫酸銅もわずかに含み、比重は四である。

私はまず鉱山の坑道を降りるつもりでいたが、しかし案内人として我々についた役人が、それを思い留まらせた。彼が言うには、また再び山を登らなければならず、竪坑の降下は困難で危険でもあった。少なくとも足から頭まで泥に覆われなければ、そこを出られなかった。これらの論拠から、日本人技師の平凡な才能を信じるしかなく、さらに夜までにする用事もあったので、それを自発的に納得するしかなく、私は坑道に隣接して、すでに廃棄された竪坑の入口を眺めることで我慢しなければならなかった。その外見は全く魅力のないものであった。建物に関して言えば、すでに述べた小屋とあばら屋しか記録するものはなく、そして乾燥させるためにひびの入った長い材木の山が非常に巧みに配置され、それはその後の焼却の燃料として供給するために用意されたものであった。

たいへん残念なことに、時間が進み、私は旅の素晴らしい同行者としてだけでなく、またこの地方と日本語の知識ですばらしく役に立ったエヴラール神父と別れを告げなければならなかった。彼としては、私に同行して、さらに進むことを強く希望したが、新潟地方の境界を越えて、さらに旅を続けると当局に止められることになる理由から、敢えてそれをしなかった。その境界はちょうど今朝越えてきたタツヤマの稜線で形成されていて、津川町まで進むことは彼にとって、慎重なことであった。この時期、日本政府とヨーロッパ列強の代表との間では、困難な問題が引き続いていたから、外国人による国内の通行は、これまでになく厳しく禁止されていたからである。我々は別れを告げ、別々の方向に進むことをとても悲しく思った。私は山の側面に沿って南の方向に降り、そしてこの時から残りの旅の間、無駄話が唯一の慰めとなった。

III

米の脱穀機　茶屋　潟の木々　舟橋　堤防の機構　火災にあった村　クラ（蔵）

道は荷馬も通行できるかなり楽なもので、前述した案内人と同行した使用人を津川町の方へ向かわせた。私は美しい谷の奥から流れる曲りくねった急流沿いの道を、しばらくの間

進んだが、すぐにサグラ（三川）鉱山の支店と思われる小さな一軒の農家に出合った。そこで私は同じ鉱石と同じ方法による作業を見たが、非常に小さな規模であった。炉は一つだけしかなく、そして長期間の作業による産物である銅滓を二、三しか見ることができなかった。それは鉱石がほとんど通行不能な道によって、かなり遠くから運ばれて来るからである。

少し前進し、やや大きな谷に出た。道と急流に沿った全ての場所は水の浸食により植物に覆われず、剝き出しになっていて、私はその土壌の異様な外観に強い印象を受けた。それはまばゆいほどの白色を示し、ほとんど緻密で大粒な石灰岩の種類が平行な波状層を形成していた。石灰岩の種類の大きな塊は谷の奥から水によってもたらせられた漂石のように思われた。

多量のツツジが緋色の花を咲かせる雑木林を通って、一時間以上歩いた後に、私は新潟と新発田の間で渡った阿賀野川の右岸に着いた。津川町は対岸で、ちょうど私の正面に見えたが、この場所で引き続き、渡し舟に乗ることはできなかった。流れが極端に強かったので、船頭は土手に沿って、鉤竿を辛そうに押しながら、岸に近づかないように押して、急いで舟を導かなければならなかった。そしてしばらく後に町の入口にあたる対岸に上陸した。私は宿へ行くために町を通り抜けたが、何も注目するものはなかった。荷物はすでに着いていて、私の到着でここを離れることになる暫く会わなかった二人の通訳はこの町を出ることに関して、おそらく何も意識していなかった。彼らは私を認めるとすぐに会いに来て、そして非常に愛想よく、私のために全てが整っている宿を取ったと言った。等々。美辞麗句を短めで止めさせ、何の説明もせずに、今後は私の前に現われること、私に同行すること、そしていかなる仕事にも取り組むことを禁じた。この決定を彼らは予測していなかったので、驚いて無言となった。そして道の真中で彼らを完全に当惑させることになったが、私はようやく彼らを厄介払いすることができたことに満足した。

まだ時間が早かったので、近くにあると言われた温泉を訪れようと考えたが、それは山中でまだかなりの距離があると思われ、日中の疲れを少し感じたことと、道沿いで採集した植物の整理をすることもあり、私はそこを訪れることを諦めた。しかし、完全に無臭で透明に見える水のサンプルはほとんど鉱水化されていないものであった。

翌朝の五月十三日、私は津川を六時半頃離れた。天気は涼しく雨がちであった。東の方へと向かったが、一時間後に木橋を渡ってトコノミガワ（常浪川）の右岸へと着き、そしてさらにわずかな距離で、私はほとんどの道の進入を妨げる高い山の麓にいた。登攀を始める前に、アナタムラ（花立村？）[12]と呼ばれる小さな集落でしばらく休憩した。私が座った場所の正面には米を脱穀するための水力による杵の種類があり、そこで私は大急ぎでスケッチをした。私は山を旅した時に、多くの類似したものに出合ったが、ナカヤマ（中山）で注目

したものは、一八七三年の旅の報告ですでに述べたが[43]、それとはかなり相違した工夫がされたものであった。ここで私が描いた装置は、小川から引き入れた水の流れをレバーとなるしっかりした棒の先端に付けられた木の桶に導き、レバーの別の先端には杵が設置され、脱穀のため米が満たされた木のすり鉢を打った。この機能は桶が水で一杯になった時に、その重量で杵を上に運び、そして突然落ちた。しかし、その外壁はとても斜めであったので、下方への運動をするとすぐに、完全に空となった。それからすぐに杵の重さにより運ばれ、すり鉢の上へと再び落ち、桶は最初の場所へと運ばれた。そして、新たな桶を一杯にし、無限に作業を繰り返した。水で満たされた桶が動力となり、杵は抵抗となる。桶は空になるとすぐ動力となる杵を戻すことにより抵抗となる。杵とすり鉢は常に家や小屋の中で保護されていることは言うまでもなく、桶が唯一屋外にあり、そしてレバーは外壁の開放を通して動く。

この短い休憩の後に、私は深い峡谷へと入り、かなり辛い登攀を始めた。道は険しく滑りやすいもので、荷物を積んだ家畜はゆっくりとしか進めなかった。私自身、息切れのために時々止まらなければならなかったが、汗に濡れた服とまだ頂上を雪に覆われている山の冷たい空気のせいで、休むすぐに非常に不快な寒さを感じた。トーノウ村[44]とノムラ（野村）村[45]を通過した後、九時半にヤケヤマ（八木山）村[46]に到着した。津川からは三時間で二リュウ半しか来ていなかった。これらの村全体はわずかな貧しい藁葺家で構成されていて、住民は哀れな様子で、山の森林にやっとのことで確立した土地である住居のまわりで続けるわずかな耕作と家畜の引き手の仕事でもっぱら生活しているように見えた。道が困難なため十一時までには着けないユクトリ（福取）[47]まで行くのに、馬を替えた。後者の村（福取）は水田の準備が始められる潅漑可能な起伏のある峡谷の高い場所にあった。天気は雨が止まず、厚い雲は山の側面をゆっくり這い、その景色を隠した。私は疲れを感じ、そしてずぶぬれとなっていたので、この場所で休憩し、昼食をとるために止まることに決めた。

十二時半頃、天気は少しの晴れ間があり、私は旅を再び始めた。小さなヤスダ（八ッ田）村[48]を通過した後、四十五分後に荷物を引き継ぐホカワ（宝川）村[49]に到着した。この場所は深い森に覆われた山中に位置し、北北東方向に雪に覆われたイリサン（飯豊山？）[50]という高い山が認められた。この場所からとても美しい風景が続き、自然が豊かで、道は悪く、馬の足跡が残り、雨ともなれば本当の小川となるような道であった。シラサカ（白坂）村[51]とシモノジリ（下野尻）村[52]に次々と出合ったが、常にその外観は前述した村と同様に貧しいものであった。住民は我々の通過を見て驚いたが、それは彼らがヨーロッパ人をめったに見ないことによると思われた。下野尻で家畜を交替するために、四時頃まで留なければならなかった。この場所から私の前にかすかに見えていた西方の大きな谷の方へ道は下っていた。この谷の奥には南から北へ津

川の川（阿賀野川）が流れていて、私は五時頃に通過した。そしてカミノジリ（上野尻）[53]村を通過した後に、宿泊することになるノザワ（野沢）[54]へ六時に到着した。後者（野沢）は何も注目するもののない村であった。

翌五月十四日の六時半に、私は旅を再開した。前日のように寒く、雨の多い天気であり、私は概して南の方向に進んだが、道は曲折が多く、磁石は絶えず方角の変化を示した。私は峡谷の急斜面縁辺の険しい道に従って進み、峡谷の両側は豊かな緑に覆われた山頂がそびえ立ち、そして頂上は雲に隠されていた。一軒の家にも出合なかったので、この地域にはほとんど住民がいないように思われ、もっぱら時々、私の隊列は反対方向から来る商品を積んだ馬の小さな隊列に出合った。日本馬はとても扱いにくいが、今は困難な通行で、その素直さと確実さを認めざるを得なかった。一年のこの時期、男達は農業に従事するため、ほとんどいつも女や子供によって引かれる。しばしば子供や女は何の困難もなく、一人で三、四匹の馬を引くが、何しろ動物達は道に慣れていた。常に藁サンダルの一種を履き、家畜の引き手は時々気を付けてそれを取り替えた。

我々は進むに従って、道は急になり、とても滑りやすく、ある場所ではほとんど傾斜が四十五度あった。しかし、一種の階段を形成する場所まで馬は一列に続き、前の馬が足をつけた同じ場所に足をつける素晴らしい本能を持っていた。さらに十歩ごとに息が切れることから少し止まった。そしてこの急な坂を越えることは、あらゆる注意を払うことしか、実現しないものであった。三時間のこの辛い行進の後、ようやく私の前に山の稜線が現われたのが見えた。そして九時半頃にタバニ[55]のトゲ（峠）へと達した。トゲ（峠）という言葉は山脈の稜線の鞍部通路を意味し、別の斜面へ通行可能なアクセス地点である。山岳地域を旅する時、トゲからトゲへと行かなければならない。

最高点の道端にちょうど茶屋があった。それは周囲から来たあらゆる旅行者にとって、半強制的な休憩場所となっていた。辛く長い歩行の後にしか、この場所には到達できないことから、一時休憩を取ることを余儀なくされた。朝から雨が止まず、肌寒い天気で、我々は疲労し、ずぶ濡れになっていたので、急いでゴザの上に場所をとった。私は激しい喉の渇きを感じ、旅でのお気に入りの飲み物いわゆる冷水の椀と小さなサケ（酒）瓶を運ばせた。日本の酒は米による我が穀物のブランデェに類似したアルコール飲料である。一般的にアルコール度は高くなく、いくつかの異なる種類があるが、その味はやや不快な刺激臭がある。いつも温水に沈めた磁器の小さな瓶（銚子）で提供され、常に小さなコップ（猪口）で温かいものを飲む。山の水はすばらしかったが、あまりに冷たかったので、それを多量に飲むことはせず、それに酒を少し加えた。これに日本人は最高の驚きを示した。この古典的な液体を飲む方法は実際に全く彼らの習慣と対極にある。このような奇妙な行動をとることができるのは外国人しかいな

い。

多くの旅行者が家の中に集まり、観察するのにかなり興味深い集団を形成していた。家畜の引き手がお茶とキセル［金属の火皿で小さなパイプ］を味わう間に、家畜は外で根気よく待っていた。雨の多い天候から、彼らは全てこの地方の雨具を着ていたが、それには二種類があり、一つは藁で編まれたもので、藁は非常に長く厚い毛並みのように見せていて、それに沿って水を流した。もう一つはとても丈夫でアブラガミと呼ぶ油の紙から成り、軽いのと同時に雨を通すことはなかった。雲が隠れて短い晴れ間が続いた。そして私は山の側面に吊り下げられたような茶屋からの非常にきれいな眺めをしばらく楽しむことができたが、このような高さは広大な景色全体を支配し、非常な起伏に富み、とにかく変化があるのと同時に緑の多いこの地方の広大な表面を一目で見渡すことほど本当に興味深いことはない。周辺が丸くなったものや奇妙に切り取られた丘で、段状に並んで全方向に広がり、そしてそれらを支配する雪に覆われた山の驚くような塊を支えるように、ほとんど積み重なっていた。目で追うことができず推測した多くの急流が全面から津川の川（阿賀野川）へ入り込むように流れ落ちていた。確かに、趣のある景色と眺望の雄大さで名声を得たアイヅ（会津）地方の山々を私は認めた。

十分に休憩をした後、今度は反対斜面より非常に傾きの少ない面に沿って下る道をたどり、私がいる横の方向に広がるかなり大きな谷の方へ進んだが、その谷の奥には津川の川（阿賀野川）の流れが蛇行するのが見えた。谷の全幅をしめた縁に、私は葉を落とした暗い枝をした木の農園を多く認め、その部分は特に地味な色調の景観を示していた。冬がその内面の発育を遅らせたので、春でも緑の飾りつけを忘れたかのようであった。しかし、もし葉を落とした木があれば、それを囲む繁茂した草木の真中で暗い大きな塊に目を引かれないことは全くなかった。それは自然環境のせいではなく、人間の行為の結果によるものである。これらの木々は産業のために開発された農園のもので、日本ではウルシノキと呼び、学名はルス・ベルニシフラ、スーマクの種類で、漆の木以外にほかのものはなかった。私はすでに下野尻村以来絶えず出合っていたが、山中に特別に植えられたものであった。近くで見ると、植物学の観点で平均十メートルに達するが、その弱々しい外見について、私は簡単に理解ができた。それは美しい漆の最高の材料を生み出す樹液の抽出を行う節度のない生産の結果と考えられた。抽出方法は非常に単純で、幹全体と主要な枝に平行で水平な多数の刻み目をつけることであるが、この刻み目は円形ではなく、円周の三分の一から四分の一で、四角形に行われた。せいぜい根元の高さまで交互にきちんと配されていて、言わば、この木の幹はかなり正確に外科医により規則的な市松模様に配された乱切りの覆いがなされている外観を示していた。この木が急速に衰弱したのはあまりに多くの乱切りによるものである。この農園の中でいくつかの枯れた木を見たが、全ては若木であり、枝の部分も完

全に枯れていた。しかし、自然にこの植物の成熟がやや遅いのは、開発の影響外のことかもしれない。それはまだ刻み目がつけられていない若木ともう刻み目がつけられていない老木のようなものであることを認めたからである。もうほかの植物の種類しか発育をしていなかった。そうではあったが、五月中旬、この地方はその生産で非常な名声を得ていることは確かであるが、花もつぼみも採集できず、私はフランスに送るために用意する標本を入手し、さらに多くの人が日本のニスのザンスイレ属アラント・ジアンドロザと、スーマックである漆の木を照合することを望んだことから、ますます残念に思った。時期がまだ来ていなかったので、樹皮の採集を目撃することはできなかったが、それは間もなく、濃い茶色のシロップを塊に凝固させる透明な液体を生み出すことになる。

十一時に津川川（只見川）の右岸に位置するカタカド（片門）村[56]に到着したが、この場所では水は南から北へと流れていて、土手は非常に大きく、流れは非常に早かった。私はそこでかなり独特な舟橋を渡った。非常に平らな浅板が長く配置された平舟に支えられていたが、この舟は錨が固定されず、杭にも繋がれていなかった。各舟は驚くような太縄のロープで繋がれていて、ゆがんだ竹の貫板がなされ、そして両岸に二つの先端がしっかりと繋がれていた。各先端はかなり高い木製のブリッジに支えられ、川の上に長い曲線を形成するようで、遠くからはつり橋のように見えた。毎年四月から六月の雪どけ時期に起こる非常な増水でもたらせられる危険を冒さないため、舟によるこうした配置がとられたのである。この時期には、小さな水の流れも急流となり、多くの場所で住民は木橋を取り除き、そして、それらの場所で渡し舟を設置した。

この場所からわずかな距離で、シタノミ（気多宮？）村[57]という小さな村があり、私はこの村まで進んで、昼食のために止まったが、運悪く、旅館も荷物の中継所もなく、そこで私はさらに旅を続けなければならなかった。この場所から、この地域はよく耕された広大な平野となり、わずかな土地の起伏を除いて、絶え間なく見える高い山々の輪に囲まれた大きな平野を形成していた。これはタバニ峠から見たパノラマの一部分であった。北東方向には、周囲の高さを支配するようなバンダイサン（磐梯山）と呼ばれる山が頂上を雪で飾っていた。トデラ（塔寺）村[58]に到着したのは、正午を過ぎていたが、ああ！前の村よりも何の手段もなく、そして一時過ぎに着いたバンゲ（坂下）村[59]で、ようやく大きな欲求となり始めていた昼食と休憩を取ることができた。坂下から道は平野を横切って東へと続いていたが、四時に南から北へ流れるオガワ（大川＝阿賀野川）の川岸に達した。それは津川の川へ流入する支流でしかなかった。大川の土手は小石と大きな石が詰め込まれていて、ほとんど深さはなかったが、とても大きく、現在の水位はあまり高くなく、私は川を木橋で渡ることができ、遠くから対岸に見えた平行に走る非常に長い堅固な

堤防へと至った。しかし、それは実際に川の土手の中にあった。それはおそらく洪水から大地を守るために構築されたものであるが、水はすでに迂回し、もう何の維持もされず、川の土手を無駄に塞いでいて、救済策を講ずる替わりにそれを悪化させていた。さらに、日本人は川岸を良い状態に保つことに大きな気配りをして、彼らは長い経路にしばしば杭を配置していた。それには二つの方式が用いられたが、一つは脆い堤の正面に水平に貫いて繋がれた樅の幹をしっかりと打ち込むもので、かなりの費用がかかるが強度に欠け、早く朽ち、さらに流れによって押し流された。もう一つの方式は川岸の抵抗力をより保証するものと考えられる。日本人は円周約〇・五メートルで、長さが三十～四十メートルと様々な種類のものがある蛇篭の一種を竹を割り、そして編んだ大きな編み目を作ることから始めた。次にそれらを配置し、可能な限りしっかりと詰みこんで大きな石で一杯にした。必要であれば、それらを水平に寝かした蛇篭の配置の上に設置し、その結果、築城工事のような外観を示した。

Ⅳ

ワカマツ（若松）町　城塞　ヒガシヤマ（東山）温泉　イシガモリ（石ヶ森）金山

四時半頃、タカク（高久）村[60]を通過し、その二時間後、若松町[61]の最初の家へと達した。より正確に言うと、二日前の火事によって焼き尽くされた残骸が市街地を形成していた。普通、日本の家屋建築には何の資材もなかったので、完全に破壊されていた。それはいつも木やほとんどが石灰でなく白土で壁を塗られた竹と葦の編垣で、町の家々は一般的に瓦で覆われていたので、習慣的に木と瓦の炭化した破片しか残されておらず、唯一、クラ（蔵）が無傷で残されていた。これは特別に火災に耐える建物であり、二階建て倉庫の一種で、その名をこう呼ぶ。このため、普通、日本人は強固な骨組みを非常に厚い土の外壁で囲み、屋根も同じく土で非常に厚くし、瓦で覆った。大抵の場合、一つの扉しかなく、そして一階だけが開放した。二つの開きは鉄の肘金が付けられた非常に厚く重い土扉を用いて、きっちりと閉められ、火事になるとすぐにこの避難所へいつも身の回りにある全ての価値ある物、商品等を運び入れ、用心深く入念に泥で継ぎ目をふさぎ、扉を閉めた。それから家族はそこを去った。普通、炎は蔵全面を覆うが、外には燃焼性の材質が何もなかったので、一般的な火災に対して、かなりよく抵抗することができた。全木造住宅は非常に簡素という理由から、火事は急速に遠方まで広がったが、火の勢いはほとんど続かず、そしてその場では藁の火のように早く、蔵は決して長くない火の勢いに抗することが可能と理解できた。これらの建物は新しい土の層を塗り重ねる前に、それを乾かせる必要があったので、かなりの費用と期間を要するものであり、またこれを新築することができるのは商人と裕福な者しかなく、貧しい階層ではその手段がなかった。豊かな地区では家と同じ数の蔵があり、火事

の後で全てが消え去った時でも、この地区は無傷のまま存在するかのように思われた。しかし、日本人は富裕でも貧しくても決して大きな災害とならない火事に対して少なからず心配をする。翌日には、彼らの住宅敷地で、ゴザの上に身を置き野営をした。すぐに大工が仕事を始め、そして数週間で地区全体が灰燼から脱した。火事の頻発は家の極端な簡素さと家具の完全な欠落で説明される。日本人が住居を作る時には、しばらく焼却することが予定され、従って、例えば、首都江戸のあらゆる家は七年を越えない期間で破壊されるのが確実である。また孤立したいくつかの寺院を除いて、日本には骨董的な記念物が何もないことはそれが理由である。

住民が中で野営する火事のあった地区を通過した後に、宿駅事務所と旅館を探すことになる中心街へ到着した。政府に雇われて旅をする慣例から、公式な料金以外を払うことなく、業務の人と家畜を保障した宿駅事務所は実際に素晴らしい制度であったが、それにはいくつかの不都合もあり、それは事務所長により選ばれた宿に宿泊せざるを得ないことをまず考慮しなければならないのといつもそれが快適であるとは限らないことであった。村ではこれは非常に簡単で、いつも旅館の選択に困惑することはなかったからである。町では少し重要なことになるが、特に外国人がほとんど訪れることがなかったので、同様に困惑することもなかった。ほとんどいつも事務所長と示し合わせた二、三番目の旅館があり、外国人客に平均的な料金を保証した。事実、よい宿泊所を見つけるため、通りを走り回るのはかなり難しく、たいていの場合、そこで指示されたものを受け入れることが強制された。最高級の旅館は主要な通りに面してあり、ホンジン（本陣）と呼ばれ、昔、ショウグン（将軍）［大君］の命令で設置された。そして王宮に来る王侯と諸侯に約束されたものであった。今日は料金を払い、宿泊することを望む全ての人々に開かれ、一般的に外国人に好まれるものであった。二番目はワキホンジン（脇本陣）と呼ばれるが、外国人は値段の高い国内級の旅館に宿泊する方法を知らなかった。

今回、私は重要な町のわずらわしさをこうむることになった。なぜならこの若松町はケン［県］の中心地で、日本における大王族の一人のかつての居住地であり、私は宿駅事務所で預けた荷物と旅館まで同行する案内人を待たなければならなかった。ところで、日本人はほとんど急ぐことがない人達である。私が待つのに時間を費やしている間に、私のまわりでは好奇心からじっと動かない人だかりが作られていたが、内陸地方では、ヨーロッパ人が来る機会は全くなかった。一般的に彼らは非常に控えめであったが、公衆に見られる特異な人物としての役割を演じることを私はついにうんざりした。この旅の間、唯一私の若い猟犬が、日本の犬の類型と完全に相違する理由から、公衆の注目を引くことに貢献した。日本の犬は長い毛、尖った鼻面、短く立った耳、非常に丸まった尾を持ち、アルジェリア固有の犬に似ていた。対照的に私の犬は指示に忠実な犬で、短い毛、白に黒がかぶった色で

あった。日本人は特に素晴らしいと思ったのが、垂れ下がった大きな耳［オキミミ］、それと乗馬鞭の形をした真直ぐの尾であった。通りや村の入口にその姿を現すとすぐに至る所で、コミ！　コミ！　という叫び声が上がるのを聞いた。私は長い間、この意味を考えていたが、この呼び名は日本人がいつも聞いていたイギリス人が叫んで犬を呼ぶカム・ヒア！［こっちへ来い。］で、日本人は全てのヨーロッパの犬をコミという名に違いないという結論を下したことを、私はついに発見した。さらに、私の動物は彼らに抱かせた興味から利益を受けることになり、調理された米の椀をかなり集めた。安全かつ臆病であったのだが、獰猛な獣と思われたので、いつも用心深くえさが与えられた。

私が旅館に落ち着いた時には、時間はかなり遅くなっていた。夕食の献立には馬鈴薯、ゆで卵、塩鮭のサラダを増やすことができた。これに関して、鮭［シャケ］は塩漬けの状態でシオビキ（塩引き）という名を持ち、日本では非常に多く消費されるもので、特に北部地方ではかなりの量が取られ、唯一、函館港では毎年船荷全てが積み出される。冬に、私は新潟の信濃川河口でこの漁を見た。

五月十五日、私はこの地方に興味深い見るべきものがあるかを問い合わせた。注目に値するこの町の城と次に郊外にある温泉と金山のことを知らされた。そこで、全てを訪問するために、私は出発時間を延ばすことにした。そして旅館の主人は私の案内人と観光ガイドを勤めることになった。私はこの町の通り全てを通過したが、本当に何も注目するものはなく、店や通りには活気がほとんどなかった。そしてある気まずいそして悲壮な空気が支配していた。大きな平野と山麓が合流する状況はかなり有利である。しかし、商業の中心とはかけ離れていて、交通手段は困難であり、城はもう領主権と役人と奉仕者の側近を保護することはない。これら全ての理由がおそらく昔日に享受した繁栄と重要性の名声の低下を若松町へもたらせることになった。

一本の美しい道が城へと通じていた。城壁に影をつくる多くの大木を遠くからも簡単に見分けることができた。土塁全体として認めた最初の城壁もまだ越えることはできなかった。この城はすでに見る機会があったオダワラ（小田原）城、オーサカ（大阪）城、タカサキ（高崎）城等と全く似ていた。実際、一つを見れば、全てを見たかのようであり、同じ形式のものであった。キオト（京都）城と江戸城のような皇帝の城塞は広大な規模があり、ほかの城とは異なっていた。しかし、全ては同じオシロ（お城）という名を持つ。

ところで若松城はほかの城と同様に、まず城壁で構成されるが、その外側に堀が取り囲んでいたが、それは現在、水生植物で覆われた泥沼でしかなかった。私はその周囲を千四百から千六百メートルと見積もった。城壁の石積みはほとんど高くなく、セメントは少しも使われていない。全体が切石の

城壁で注目され、規則的で幾何学的な形をした石は一つもなかった。しかし、各塊はそれが占める場所と隣接するものに組み合わせて特別に切られていた。要するに、キュクロプス[62]のシステムであった。城壁を囲むものは何もなく、そして張出角と配置された壁龕はほとんどわずかであり、少し偶然であるが、細心の注意で切り出された花崗岩の驚くような塊による稜が作られるように思われたが、ほかのものよりも不規則であり、稜はほとんど垂直であり、全てが胸土（土塁）への圧力により抵抗力を与えるため、内側の方へしっかりと傾けられていた。入口の大門は石積みの中に埋め込まれ、驚くような大きさの骨組みで形成されていて、そして鉄の縁取りがされた重い扉が下げられていた。二番目の土塁は最初のものと明らかな違いはなかった。そして二つの間と胸土（土塁）までは、城内への外から隠す緑の幕を形成する樹齢数百年の木々があった。私はようやく三番目の土塁の中に進入した。その城壁はとても高く、そしてその中央には会津候の住居である五階の構築物があった。［管轄地域の名を取ったもの］

領主の住居へ到達するために、私は各種の階段を登る遠回りの小道を通らなければならなかった。そして執務に就いた役人や兵隊の言わば宿営や兵舎である細長い建物にようやくたどり着いた。これは急襲の時でも、領主の所まで侵入することの困難を説明するものである。

中央の建物は遠くから見て、かなり素晴らしい小さな宮殿やまた五階建てのパゴダ（寺院）を連想させた。実際には堅固に確立された大きな骨組みと石灰の白土で塗り替えられた簡素な土砂止めで囲まれたものでしかなく、その大きさを除いて、小さなあばら屋とさほどの違いもなかった。しかし、その均整と五階建ては、遠くから趣のある外観を示していた。

案内人は職務に対して、やや熱心すぎるほど責務を果たした。そして二階に行くことを許さず、板に穴をあけ、屋根を破り、そして、外装を破片にした砲弾の痕を私に注目させるため、絶えず足を止めた。心の底から偽りのない悲しみの調子で、構造物の開口場所を見せる度に、イクサ！　イクサ！［戦争］と叫んだ。けが人達は自らの腹を突いたらしい。しかし、私には何の説明も必要なかった。この場所自体かなり深い悲嘆を物語っていた。この堅固に積み上げられた廃墟、銃弾で穴だらけの壁、板張りに打ち込まれた砲弾を見ると、ここでは戦争が至る所全てにかなりの大災害であり、何もなかったが、文明化した軍隊が侵攻したものと自然に考えられた。城は大君の支持者により守られ、ミカド（天皇）の兵隊に対して、一八六八年に本拠として支えられた。そして、残忍な行為をしたのは天皇の兵隊であった。この時期から城は荒廃した。唯一、樹齢数百年の木々が廃墟の影を覆い続け、野草はまだ緑で隠すのに成功していなかった。これらの草の中に、白いダンデライオンの花［日本タンポポ］を見つけ、野生種と考えられる最初の標本であったので、いくつかを採集した。そして、数年前までこの国にあった封建制度の唯一最

後の拠り所である遺跡を見たのだと考えながら、私は城を出た。

二番目の訪問は山の峡谷の中で、町の東方一リュウの距離にある温泉であった。非常に美しい透明な急流に沿って、しばらく進んだ後に、入浴施設のあるヒガシヤマ（東山）村[63]に到着した。この村は三十軒ほどの茶屋で構成され、一階はいずれも温泉の浴槽があった。全ての家の清潔さは注目され、さらに豪華であり、日本の習慣では快適なものであった。あらゆる所で、本当にギリシャとラテンの弦楽器の爪である三角形の象牙板により弦を振るわせるギターの一種であるサミセン（三味線）の響きが聞こえた。この種の施設の中には、ゲイシャ（芸者）と呼ばれる職業歌手が楽器を弾き、日本の人々の大きな楽しみとなっていた。しかし、真実としてはヨーロッパ人の耳には日本音楽の基本となる恐ろしい不協和音によって、耳障りな試練となっていた。

私は次々に三軒の建物に入り、続いて浴槽に供給する温泉へ行った。それは言わば山の高い場所にある源泉から生じるものであった。温度計は平均五十六度を示し、さらに何の鉱水化の指標も提供しなかった。完全に無味無臭で、何のガスの放出もなく、十八ヵ月（一年半）前にミアイソシタ（宮ノ下）で見たものを思い出させた[64]。急流を対岸に渡り、性質の異なった温泉が見つけられるのではないかとの希望から、いくつかの建物に行ったが、全く同じものであり、サンプルを採集しても無駄だと判断した。にもかかわらず、この地方で、この温泉は特に痛み、傷、水疱疹等の治療にかなり大きな名声を得ている。実際、清潔な状態で回数が多く、さらに長時間の入浴による結果として、皮膚の病気に対して有効性がある。筋肉その他の痛みに関しては、その高い温泉特性により完全に治癒はしないまでも、非常によく鎮めることができる。普通、日本人は四十～四十五度の湯に入浴する。そして数時間を我慢することができることを思い出さなければならない。この種で特異な事実を見たことがあるが、中でも、横浜の仲買商がハコネ（箱根）の近くのアシノユ（芦の湯）硫黄泉で二十四時間（一日中）過ごすことであった。一般的な病気の痛みには慣れていたが、日本人医師は治癒しないにしても、一時間ごとに十二回の入浴を勧めた。この男はその支配者（痛み）が翌日に消えることを知り、処方を満たす方法と考えた。そこで、四十三度の浴槽の中で首までつかり、出ることなしに続けて十二時間（半日）そこに留まった。それは治ったが、言わば、事実としては筋肉その他の痛みにはこのような治療では抵抗することはできず、日本人だけが特に抵抗力への考え方を持つ。

施設としては、一八七二年に芦の湯と熱海で見たものと大きな違いがあることが注目された。芦の湯と熱海の温泉については、すでに述べる機会があったように、入浴者は同じ浴槽に年齢や性別の区別なく入り、そしてしばしば公衆の目にさらすことになった。ここには同じものはなく、男性用の特別な施設と女性用のものがあることを認めたが、さらに全て

の浴槽は時々柵を通して入浴者を通りすがりに認めることができるものであった。日本の習慣では何の用心もなく、そして公権力の命令しか重要視されなかった。

旅館へ戻り、大急ぎで昼食をとる間に、話題にした金山を同日に訪問することを望み、出発の準備をさせた。それは道の左手約一リュウの距離にあったので、私は宿泊することになる村へ直接荷物を送った。若松町を離れたのは午後一時半であった。そして金山のあるイシガモリ（石ヶ森）と呼ばれる場所に[65]三時過ぎに到着した。これは山のかなり高い場所にあり、そこに着くには、かなり切り立った道を非常に迂回をしなければならなかった。そして広大な姿を見せている磐梯山のわずか南に位置していた。建物施設は全く雄大なものであり、一棟の倉庫ときれいな三軒の家で構成され、その一つはかなりきれいな鉱山長の住居であった。鉱山長は若い男で、かなり親切に私を迎えた。この家でしばらく休憩をとった後に、鉱石の洗い場である隣の倉庫へ私を案内した。ここで金は白い母岩に混ざった自然のままの状態であったが、金属片を認めることが困難なほどに小さく、抽出方法は次の通りである。

鉱石は平均的に拳大のような大きさの断片で運ばれ、まず野外の薪の火で燃焼させられた。思うに、この作業は乾燥以外の目的はなく、その重量の大部分を失い、そこでより小さな断片に割り、それから粉へと変えられた。

三番目で最後の作業は、この粉を洗うことから成り、そしてより興味深い方法であった。この倉庫の中では、アルジェリアのアラブ人が粉を引くために使う手引き製粉機にかなり似た六台の石製ひき臼が水平に地上約一メートルの高さで同じ列で配置され、洗いの仕事に割り当てられていた。このひき臼は石製で、下は凹みのあるもので、均等な皿が上を回る。上面は軽い凸状をして、二本の棒を固定した連接棒により動かされた。各ひき臼の真中には穴があけられ、倉庫の横一定の高さに渡された竹のパイプから水が流されていた。一人の女が手に棒を持ち、ひき臼にかなり早い回転運動を伝えていた。その脇には鉱物の粉で満たされたバケツがあり、時々、ひき臼の真中の穴にそれを木匙一杯注いだ。穴を落ちた水の流れは粉を溶かし、そして回転運動の結果、外へと押し流し、これは一般的な製粉機が粉を出すのと同じ方法であった。押し流された粉は傾斜面に配置された木の小板の上に集められ、そして曲線を描いた少し深い縞の表面に置かれた。流れる水は特別に配置された小さな竹のパイプで、ひき臼に供給を続け、粉全部を引きながら、小板の表面を走った。しかし、金の小さな粒子は途中で、その大きな比重から縞の中に留められた。そして母岩の破片だけが地面へともたらせられた。労働者が徹夜の作業でひき臼を回し、小板の上に金がかなり溜まったと判断した時、少し水が入った特別のバケツを揺さぶり、金片が現われ出て、バケツの底に沈んだ後で、それを取り出した。茶碗でそれを採集するのは簡単だが、その生産物は非常に小さな輝きのある金属片の形をした本物の金粉で

あることを確認した。要するに、この抽出方法は本質的に金を含む砂鉱と、ここでは鉱石を焼却し、粉で供給された砂鉱を機械的に準備しなければならないことを除いて、何の違いもなかった。

その上、採掘はほとんど重要でなく、鉱石の洗いは六人の女で足りた。ここでは住居のある円丘の頂上に掘られた坑道で採掘される。坑道の入口は一人の男が通過できるように、かなり高くそして大きかったが、あまりぴったり合わない木の扉で閉じられた。私は非常に狭い坑道に足を踏み出し、山の中へと水平に入っていった。しかし、すぐにかなり急な坂で地下へ入り、地面には油で一杯になる椀で作られた粗悪なランプが置かれ、燻るように灯心を燃やしていたが、暗さを消し去ることはできなかった。全面からは水がしみ出し、私は厚い泥の中を進んだ。坑道の奥底から、凍りつくような空気の流れが入口の開放の方に突進するようにやって来た。私は汗まみれであったので、震えが止まらず、この状態でさらに遠くまで行くことはあまりに軽率であると考え、地上に戻ることを急いだ。鉱石の採掘には四十人ほどが従事しているらしい。今回は、その数を信じたい。道を戻り、鉱山長に別れのあいさつをし、労働者への謝礼という理由で、わずかのキンサツ［紙幣］を与えた。鉱山長は祝儀を認めると、鉱石のかけらを持ち去ることを許し、元の道へ戻るために通る森へ導くための案内をした。アカイ（赤井）村[66]に着いた時には、すでに五時になっていた。そしてかなり長く急な坂を登った後で、南東方向に向かうかなり広大な平野が見えた。全体が水田耕作され、この状態になったばかりのところであった。道は非常に平坦で、木立に半隠しされたいくつかの美しい集落を通過していた。すでに少し疲れていたが、左右に隣接する山の峡谷にはまだ雪が多く残り、私はすでに冷気を感じていたので、足を速めなければならなかった。その上、私は植物の成長が標高による温度低下から遅れているこの場所を見て楽しんだ。例えば、桃の木や梨の木がほとんど花を付け始めていたが、出発の時に新潟の平野では、それらが花を付けてから、すでにかなり時間が経っていた。

V

再び火災にあった町　イナシロ（猪苗代）湖　ツグミ　電信　オーダワラ（大田原）の不毛地　日本のキノコ　園芸の国

夜七時頃にようやく宿泊することになるアラ（原）村[67]に到着した。しかし、この村には灰しか残されていないのを認めて、どれほどの失望をしたことか。前日の火事で全てが破壊され、習慣から、人々は野営し、野外で米を調理し、ゴザでテントを張り、避難生活をするのを見た。見渡しても無駄で、立っている家は一軒も見えず、私も野営せざるを得ないのではないかと不安に思い始めた。蔵に関して言えば、貧しい地域には存在せず、幸運にも、村はずれの緑の茂みで守られ、視界から隠されていたかなり大きな三軒の家が無傷でまだ残

り、私の荷物はそこにあると言われた。私は急いでそこに行き、実際にそれがかなり大きい家であることを認めた。しかし、状態はかなり悪く、実を言えば、全面が開放された貧しい藁葺家であったが、数世代が生まれて死ぬほどの長い時間で黒くなったゴザが床を覆う部屋のように思われる場所があった。しかるべき場所には天井も何もなく、そして私の頭の上には藁の屋根しかなかった。私は高さ数ピエの紙のつい立で使用人と家の人々と別になった。それには大きな穴があけられ、子供達は好奇心から私を見るために頭を入れた。いかにせよ、かなり強く降り始めた雨で、この避難所に私は満足していた。私は食事の準備を急がせた。それはいつものように、箱の上の盆であった。宿は米しか提供することができず、その夜は使用人が工夫した野菜のスープからなる普通のポタージュを除いて、私の食糧を使わざるを得なかった。道沿いで採集したものは決して食べないが、畑での数種類の野菜一握り、その中には相変わらず姿を現すピサリ［タンポポ］、野生のオゼイユ［カタバミ］、クレソンの一種［ミズナ］、その他いくつかは別にして、私は知らなかった。到着するとすぐに、使用人は少しの油と塩で全てを料理し、手に入れることができた野菜の大根［ダイコー］、ラファヌ・サティブの種である大蒜［ニンニク］、玉ねぎ［ネギ］（ママ）、人参［ニンジン］、それに時々ジャガイモ［ジャガタライモ、いわゆる、バタビィヤの根菜という呼び名で、オランダ人により持ち込まれた理由から］のようなものを加えてから、さらに使用人は一握りの米［コメ、白米、メシ、炊いた米］をそれに加えた。私はフランスで認められている料理の準備することをあえて主張しなかった。しかし、それはなかなかのものであった。その上、苦しい一日の歩行の後にいつも提供され、空腹に助けられて、私はとても腕の良い料理人の野菜スープを喜んで食べた。

翌朝、五月十六日、前日は朝から夜まで歩き続けたが、実際には目標とした三リュウ以上は進めなかったので、私はできる限り早く出発した。しかし、それは無駄な努力で、もし私が政府の職務ではなかったなら、荷物の運搬人を見つけるのにも苦労することが想像された。実際、全ての村人は火事にあった家の再建に忙しく働き、森が近く、その上、全ての日本人は生まれながらの大工であったから、それはおそらくあと数日で終了すると思われた。

道はかなり平坦で美しく、すぐに私は前日遠くからしか見えなかった畑に出合った。稲藁のゴザの下にまだ若い植物が配置され守られていた。日本人はそれを人参［ニンジン］と呼ぶが、中国のジンサン［アフリアゼのパナー・カンクフビウム］と同じものである。この植物は北日本地方でしか栽培されず、そして住民は刺激性と強壮性の特性があると考えているようである。

間もなく私は、溪流縁に沿い、森と薮を通る山の斜面に曲りくねって作られた急な道を見つけた。この地方の眺望はいつも素晴らしく、そして山はかなりの森林であったが、不運

にも、道があまりに険しく、従って、農耕の可能性は何もなく、村は珍しく、人気もほとんどなかった。そして、小さな谷の奥でいくらかの耕作の断片に出合うのは時たまでしかなかった。昨年、すでに指摘したように、ほとんど完全な沈黙がこの静寂を支配し、渓流の音と時折あるツグミの鋭い鳴き声を妨げるものは何もなかった。ツグミは私が時々垣間見た唯一の鳥で、最も特異なさえずりをする種類の一つと想像できる。それは非常に早く輝いた鳴き声で始め、力強く延ばして歌い、次第にゆっくりとなり、その長い鳴き声が終るまで、だんだんと間隔があき、そして鳴き声も弱くなる。そして四間隔で二音の鳴き声で終る。この鳥を私は離れた距離でも解るが、とても臆病であると思われ、ほとんどひばりの大きさで、輝いた羽毛をしている。鳥篭のものは見たことがなく、森の奥でしか聞いたことがない。

苦しい歩行の後に、スグモレと呼ばれる峠[68]の頂上に着いたのは、八時半であった。この場所では山と峡谷のあらゆる印象から想像できるこの地方の非常に大きな広がりを発見した。しかし、東からやや北にあたる私の右手には、山を越えて、まず平野を覆う雲と思うような広大で平坦な水面を認めた。使用人はオーウミ（大海）と言い、それはいわゆる海のことで、私の経路では、太平洋を認めるには離れ過ぎていることから、非常に驚かされた。それはイナハシロ（猪苗代）という大きな湖であり、内陸部の小さな海にも見える。かなり注目され、訪れたい希望が強くなったが、不運にも、それには二、三日が必要であり、六日間の旅で、さらに百リュウ以上を行くことを考慮しなければならなかった。私がいた高い場所を離れる前に、私はスグモレの地点と分水嶺となる山脈を確認した。その時までは、平野から平野、山頂から山頂へと登り、そして北や北東方向に向いて、日本海へ注ぐことになるいくつもの水の流れに出合ったが、疲れはなかった。今後は、もう全ての水の流れが到達することになる太平洋に向く山の斜面を下るしかなかった。

三十分後に、かなり緩やかな坂でアカヅ（赤津）村[69]に到着したが、まだ出発から三リュウしか踏破していなかった。新しい馬に荷物を積む間に、近隣の川で取った新鮮な魚を篭で運ぶ男が通過するのを見た。これはアユ（鮎）と呼ばれる我がニゴイの大きさの白い魚の種類であった。時間もなく、昼食の場所もなかったが、新鮮な白味魚を口にする素晴らしい機会は失わなかった。私は持ち帰り用にその小魚を買わせた。

それからフクラ（福良）村[70]を通過し、そして昼前にミヨ（三代）村[71]に到着した。そこで休憩をとり、小魚を食べることにした。準備をする間に、あらゆる日本家屋にあるものと同じに見える宿屋の小さな庭に腰を下ろしたが、私の注目はいくつかの花瓶を囲む、光輝く砂の外観に引かれていた。この砂は大部分がガラス質の立方体で形成されていた。美しい黄色の非常に光った鉱物で、おそらくそれは鉄分を含む黄鉄鉱、鉄の硫化物と考えられた。大部分のガラス質は完全な幾何学形をして、何であるかを決定することで私は時間を費やし

た。これを見て、宿の主人は自由に見ていいと言った。なぜなら、この地方ではそんなに珍しいものではなく、実際、村から二リュウの場所に円丘があり、丘全体が鉱石であるが、何にも利用されず、時たま、道にまかれたり、花瓶に散りばめられたりした。この場所を訪れるのは非常に時間がかかるので、私は宿の主人にサンプルとして貰う許可を得た。

一時半に三代を出発し、会津とオーショウ（奥州）の国境となる峠の頂上に三時過ぎに到着した。会津の国はおそらく若松が中心地となる地域の呼び名である。この場所で終わるが、この地域は奥州という大きな地方の一部分でもある。またムツ（陸奥）地方とも同じでもある。日本の地域には常に二つの名前があり、一つは真の日本名であり、もう一つは一般的に中国式の発音の第一音節で形成され、地域を意味するトーホウ語［中国語でチュウ］に従う。このように例えば越後地方はエッチウ（越中）と呼ばれ、コーズケ（上野）地方はジョシュウ（上州）、シモヅケ（下野）地方はヤシュウ（野州）と同様に続けられる。中国語に由来する後者の名前は、実業家階層と中国語を使用することが高尚な言葉を話すことと誇る人々には、ほかの名前より頻繁に使われていた。

国境である場所の道端には、旅行者に関係する標示が大きな文字で書かれた二本の太く四角い杭が立てられていた。そして、この杭は村の入口と道の分岐点にあり、旅行者への当局の配慮を示していた。会津の国との境界にあたるこの峠から、私は時々両側が険しく、しばしば自然に富んで、趣のある風景を通過するほどに良い道を少しずつ南東方向に下った。中継地で荷物を積み替えるため、セイシドウ（勢至堂）村[72]を通過し、六時頃、宿泊地のユガワ（湯川？）村[73]に到着した。

五月十七日、この地域は特別に記録することは何もなく、常に同じような谷と丘、川や渓流に絶えず遮られることの連続であった。しかし、登りよりも下りの方が多く、前日より疲労は感じなかった。私は標高の低下と山が険しくなく、農業はより進展し、村もまた珍しくなくなり、人が多く認められるようになった。マキノウチ（牧之内）村[74]とカミゴヤ（上小屋？）村[75]を次々に通過し、正午にイタヤ（板屋）村[76]へ到着して止まったが、朝からは四リュウ半を来たことになる。道の途中では、小キャラバンで行進する多くの馬の一団に出合ったが、馬の引き手は私を認めるとすぐに、私を自由に通過させるため、横に並んで、馬に乗る者は急いで降りた。いつも日本の人々は役人の通行の際に脇に寄り、膝をつき平伏しなければならなかったからである。今日では、それはもう義務ではなくなったが、この習慣は内陸地域では本当に定着していた。外国人に出会うと、しばしば政府に雇われていることを知っていたので、人々はまだほとんど昔のように行動をする。例えば、横浜やほかのヨーロッパ人に開かれた港の周辺では同様ではなく、単に礼儀正しくないだけでなく、無礼な人々に会うことも珍しくない。彼らはほとんどサムライ（侍）階級に属し、時々、大きな刀でヨーロッパ人を切る昔の習慣をまだ完全に諦めていないと言わざるを得ない。最近、

函館で腕が鈍らないことを欲する侍にドイツ副領事が殺されたばかりである。

板屋に到着する前で、使用人と私だけで道を進んだ時、三人の若者が全速力で走って来て、我々に合流した。彼らは非常に勢いがあるように見え、そして荷物の輸送のため、前の村で使用人が与えた金札を一人が手に持ち、それに関して口論を始めた。私には理由が解らなかったが、彼らは使用人に声をかけて、他人に仲裁を任せたようにも見えた。突然、彼らの中で大柄の一人が手に金札を握って駆け出し、確保できなければ、おそらくその場で殺そうと、手に持った鎌を振り回した。にもかかわらず、彼らは一緒に引き返してきた。私には後で何が起こったのかは解らなかった。しかし、翌日、私は三人の中の一人が夜の間に殺されたことを知った。私には金札の事件の続きではないかと思われた。

板屋村で昼食をとった後、私はまた旅を続けた。私の背後に高い山を残すに従って、この地域は景色を著しく変えた。農耕土壌は大きな広がりを見せていたが、しかし、肥沃で簡単に潅漑することが可能であったにもかかわらず、まだ広大な荒地のままであった。それは大地に対する労働力の欠如による結果を示しているに相違なかった。一時間以上の歩行の後、かなり大きな谷に出合い、そして突然、道はかなり広くほとんど我が（フランスの）県道に思われるような、ほど良く維持された大きな街道へ出た。類似点を加えれば、道に沿って、電信の線があった。鉄線の杭を見ると、この国にはない景観と通行の習慣であり、私自身、我がフランスの街道ではないかと思われた。私は今、北の地方から江戸へ行く日本の主要な街道の一つであるオウチュウカイドウ［いわゆるオウチュウの海の道］と呼ばれる街道にいた。電信に関しては、設置されて間もないもので、線はまだ完成していなかった。

天気は暑くそしてうっとうしいものであった。大きな雲が積み重なり、雷雨が来ることを予告していた。そしてシラガワ（白河）町[77]にはもうあまり離れていなかったので、私はできる限り急いだ。すぐに私の頭上で雷鳴がとどろき、町の周辺に入った時、頭の先端に雨の雫が到達した。最初の家に達した時、雷鳴が激しく鳴り響いた。まず、大きな霰、強い風の一撃が続き、雨が雫がなく降りしきったが、すぐに滝のような雨となった。私は貧しい篭屋である最初に到着した家の中に避難した。そして私は雷雨が過ぎるのを待った。雨が止むとすぐに、私は町を小さな川で分ける大通りを通過し、そしてこの夜の宿泊地の調査をしたが、白河はこの地域の中心地であった。私にはいつもの心配があり、町全体を通って、宿駅事務所まで行かなければならず、問題を解決するのは簡単なことではなかった。道は馬と商人で混雑していた。完全に混乱した状態であった。ようやく、事務所の密使が私を迎え入れ、そしてかなり快適な旅館へと導いた。そこで私は卵と平凡なキノコ以外の食料を手に入れた。提供されたものの中には、海の素晴らしい魚があり、それは雪の中に貯蔵されていたので、完全に新鮮であり、太平洋岸にはまだ二十二リ

ュウ以上の距離があるから、本当に豪華なものである。この魚はタイ［セラヌ・マルガヌリ］で、中国と日本の沿岸では非常に評価されるものであり、その夜、私は豊かな食事をとった。

白河町は若松町よりもとても活気のある外観を示していた。そして非常に商業的な町と見え、それは非常に交通量のある大街道に面した環境で維持されているに違いないが、しかし、この町はあまり大きくはなく、三本の長く広い通りだけで構成されていて、いくつかの貧しい地区がそれを取り囲んでいる。また城があるが、現在は放棄され、ほかのものと同じように廃墟となっていた。巨大な木々以外に何も注目するものはなく、斧と砲弾により尊敬までもが放棄された。そこを訪れる時間は十分にあったが、地面は軟弱であり、さらに、私はまた少し疲労もしていたので、早く休むことに決めた。

翌日、五月十八日、白河町を七時少し過ぎに出発し、南の方角へ向かう奥州街道に従った。この地方はすでに前日とは異なり、もう私は山を登りも下りもすることはなく、曲折の続く峡谷もなかった。田園はいくらかの耕作と雑木林に覆われたあまり高さのない土地の起伏しかなく、道はいくらかの場所で完全ではなかったが、かなり広くて、人力車の通行は可能であった。また私は恐ろしいほどのでこぼこにもかかわらず、車に乗ることを恐れない何人かの日本人に出会ったが、私はより安全に早く旅をしたかったので、自分の足で歩く方がまだ良かった。私は地方の役人しかできないヨーロッパ式の服装をした日本人に出会った。最初、彼は何も言わずに通り過ぎたが、しばらくして、おそらく彼には私の身分とこの地域を旅する権利があるかを確認する義務を果たそうとする考えが起こった。道を引き返し、私の使用人に満足するような説明を求めたが、私にあいさつをするだけに止め、そして町の方へ道を進んで行った。

最初、私は道の両側に側溝、盛土と特に絶え間のない電線があるヨーロッパの街道に似ている理由から、この街道を少し単調に思った。それら全ては日本的な風景を損ない、そして南方を除き、全面を地平線で閉ざす大きな山脈が縁取りとなっていた。この地方には適合していない大街道とまだ少ない鉄道の詳細を自由時間に山道から見ることを望んだ。もちろん、私は旅行者の視点から言うのだが、存在する五、六本の大街道は車の通行から非常に管理状態が悪く、鉄道に関しては、まだ数キロメートルでわずか二区間しかなかったので、それら完備にはまだ長い時間がかかる。

間もなく私は陸奥（奥州）地方を離れ、下野地方に入った。シラサカ（白坂）村[78]で馬を替えるために止まり、アシノ（芦野）村[79]へ正午過ぎに到着し、昼食をとった。四時半にナカガワ（那珂川）の左岸に位置するコボリ（越堀）村[80]に暫く止まった。その場所は急流で、私は渡し舟で渡らなければならなかった。三十分後、私は対岸のナベカケ（鍋掛）[81]に、宿泊するために身を落ち着かせた。

翌日、五月十九日、私は常に奥州街道に従い、九時にオホダワラ（大田原）[82]へ到着した。しかし、この街道は江戸へ直接向かうので、私は富岡とニッコウ（日光）と呼ばれる有名な場所を行くことを望み、西方へ向かう別の道を行かなければならず、今度は本当に日本の道であった。ほとんど大田原村を出る時には、日本ではまだ見たことがないような大きな平野の中に入った。それは直径三リュウ以上の広さがあったが、広大な地面には何の耕作跡も住民も見えなかった。木も低木も大きな草もなかった。地面は芝で覆われた大きな草原の単一さで、その上はきんぽうげの黄色い花とアネモネの種類の赤い花が咲く緑地となっていた。私が従った道はもはや道というものではなく、歩行者に付けられたほとんど草の上の跡である五、六の小道に分けられていた。大きな牧草地の真中に着いた時、私は方向を定めるのと、このような素晴らしい大地を放棄した理由を見つけようと努めた。地面は明らかに非常に肥沃で、山から下るいくつかの小川が自然に流れていたのだが、この独特さにも満足いく説明が見つけられなかった。森の欠落を示したが、おそらく、かつてこの平野は収穫物に覆われていたが、数世紀の間、日本を血で染めた集団による戦争の後に、不毛の地へと変えられた。私は同様に氷河による不毛で、日本政府が耕作しようとして、数百万を無駄に費やしても成功しなかったエソ（蝦夷）島のことを思わずにはいられなかった。これに対してここは日本島の真中であり、収穫には種を蒔くしかなかったが、しかし、政府自身が幻を追って現実の物を失うのを止める日が来るのだろうか？　私がこの小さな不毛地の境に着いた時は、正午近くになっていた。そして昼食のために止まったサワムラ（野沢か？）村[83]を取り囲むいくらかの耕作に出合った。私は六時間の歩行の後で、食欲が刺激されていた。しかし、ああ！　私の食料のパンは尽きて、それから私はビスケットを少しずつかじることを余儀なくされた。わずかな代償として、いつものキノコの割当てを倍にした。これについては、旅の間中、私に提供されたキノコはヘブライ人の大篭で、密林で迷った旅行者にとってのパンの木であったと言わなければならない。この国の主要な部分を覆うのは、多くの森と林であることから、日本では食用キノコが多量にあり、そして次のものが食用になる主要な種類である。

I、ハラ茸種

第一はシイタケ（すなわちコナラのキノコ）。笠の上方は黒色。子実層は薄片で繊維状。下部は灰白色。この種類は新鮮な状態のものがない。しかし、住民は特に乾燥した食料として使用する。一年中消費され、かなり重要な商品になる。

第二はマツタケ（すなわち松のキノコ）。香りの強い種類。笠は白色。子実層は白色の薄片で繊維状。肉は少し堅い。前の種類より評価が低い。

第三はサマツ（すなわち早生のキノコ）。前の一種類で、若い松の根元に生える。同じ性格だが、その香りはもうかなり強い。表皮はかなり堅く、そして幹は同様にとても太い。

第四はシメジ。笠が白い種類。子実層は白い薄片。非常に美味。

第五はダイゴシメジ。前の種類の一種でより肉厚の幹しか違いがない。

第六はセンボンシメジ。太く共通の菌糸体を持つ小さなシメジの非常に多くの集合を呼ぶ。千の頭のシメジを意味する言葉を語源とする。

II、イグチ種

第一はコタケ（すなわち香りのキノコ）。コナラの根元に生える種類。笠は褐色。上部は黒色。かなりの大きさがある。子実層はかなり長く円錐形の筒状を形成し、ほとんど密ではなく、わずかに毛の生えた外観を示す。この筒と幹は同様に灰色がかり、乾燥した状態しか使用されない種類である。

第二はノノブキ。完全に白いキノコ。子実層は白い筒状を示す。コタケのような乳頭突起が似ている。

III、ソウメンタケ種

ネズミタケ（ねずみのキノコ）。完全に白い種類。サンゴのような分枝を持つ。

IV、ホコリタケ種

ショロ。越後地方で一般的な種類。しかし、南の地方では珍しく一般的ではない。隔膜が粉状になる前の若い状態しか使われない。この若い種類は日本人によりかなり評価されるようで、私には平凡な匂いとしか思われず、周皮は堅い。

野沢村から出る時、私はオキガイ（箒）川を渡し舟で渡らなければならなかった。そしてヤイタ（矢板）村[84]を通過した後、五時頃にタマニ（玉生）[85]に到着し、宿泊することに決めた。この小さな村は非常に木が多い丘を背にして、農民が住むいくらかの貧しい家で構成されていた。

翌朝、五月二十日、私は南西に向く丘の麓に沿った道に従った。白河を離れてから、左右が地平線となる二つの山脈の間を歩いた。一つは会津の国の山に続くもので、もう一つはかなり離れた太平洋の縁辺となるミト（水戸）の国の方に延びていた。私が通過した地方は素晴らしい涼しさが支配するきれいな森を切り開いて、本当に美しい耕作が見事に覆っていた。この平野は少し起伏があり、離れた場所から見ると円丘状を示し、風景の美しさを増すことに貢献していた。現在、畑は非常に美しい収穫期の麦で覆われ、まだ田植えがされていないいくつかの水田があった。

フニ（船生）村[86]の後、私はまたシノガワ（鬼怒川か？）を渡し舟で渡らなければならず、二時頃に昼食のため、オータリ（大渡）[87]に着いた。私はイマイチ（今市）[88]と呼ばれるかなり大きな村に着いたが、そこで私は荷物の問題を解決するために止まることを余儀なくされた。ここは重要な場所のようで、事務所周辺は馬と商人で混雑していた。とても簡単なことだが、問題を解決するために私は一時間近く待つことを強いられた。実際、日光までは二リュウしかなく、今市を再び通過する必要があったので、宿泊と一、二回の食事に必要なものだけしか荷物を持たず、最も大きな荷物は預けさせた。

ようやく、南西方向に向く日光への道をたどり、奥を小さな急流が流れるきれいな谷の中に進入した。この道の両側には巨大な大きさの樹齢数百年の松が配置され、その交錯した枝は太陽光線を通さないドームを形成していた。そしてこの堂々とした外観は、日本で最も崇拝される神聖な場所への接近をすでに示していた。木の幹は非常に接し、しばしば地上三、四メートルまで二、三本ずつが接合していた。私は五本の幹の集合を見たが、共有の基部は一メートル近くの垣樹の上に七メートル以上の高さがあるものであった。五時に日光村[89]の門に着いた時、私の前に、真直ぐで長く広い道を認め、それはかなり傾斜のある坂で、大きな石段がある間隔で切り出され、その全長の真中には小川が流れていたが、山の村々ではどこでも同様であった。道の途中で、私はほとんどの家が宿屋と旅行者用の物を売る商店であることを認めた。この村の人々は明らかに毎日興味と信心でここへやって来る多くの旅行者の落とす金で生活しているように見える。

私が泊まった旅館は、全旅行期間で最も快適なものであった。全てが新しく非常に清潔であった。小さな鑑賞用の庭に面した離れ小屋が私に提供された。私は豪華に思われる二階に身を落ち着けた。それは日本式よりはるかに飾られていたが、床にゴザと屋根の下に紙の天井と家具しかなかった。私が到着するとすぐに、廊下の外に紙の壁を急ぎ設置した。これは日中開けられ、夜は廊下に変えられる木の板戸によって閉じられる。そこで旅行者は外側を板戸で、内側を紙の幕で閉じられ、二つの壁で守られているようであった。

染み入るようなこぬか雨が私の外出を阻んだ。そして不運にも、それが宿泊地の下にある谷の眺望も隠した。夕食の時間を待つ間に、私は外側の廊下でヨーロッパ式の折りたたみ椅子に座ったが、それはこの場所に外国人が珍しくないことを示していた。実際、日光への旅は、政府の許可を得た外国人にはお気に入りの旅行先であった。私は旅館の小さな庭の詳細を観察することで時間を過ごしたが、それは裕福でも貧しくても、日本のあらゆる家に存在する形式の庭と思われた。しばしば、それは非常に小さくて、一辺は三から四メートルである。長さ二十歩、幅十から十二歩あったので、目の前のそれは相対的に広く見えた。従って、そこをほとんど散策することができたが、ほかよりも小さく、散策の目的で作られたものではなく、観賞用にしか用意されていなかった。

唯一、観賞用の園芸に関して、日本のものは我々の形式と全く異なる。我々は特に野外、空間、花かごをあざやかに彩る大きなポーランドの芝、完全に力強く成長する低木の茂み等を好む。要するに、我々は花壇の回りを散策し、植物の香りの中で新鮮な空気を吸うことを愛する。これは日本人の好みでは全くなく、細心に庭を片付けることから始まり、草一本もないように見える。さらに草が生える手段もほとんどなく、表面は大きな砂利で覆われるが、我国では、花や芝で占められ、小道だけに砂がひかれる。一歩間隔で大きな石が配置され、足を濡らさずに通るために、同じ方法でほとんど深

さのない浅瀬に石が置かれた。だから、地面は剝き出しか石や砂利で覆われ、それは下工作のためであった。それから装飾として、非常に小さな種類の木と低木が土地一面に植えられた。第一に最もよく使われるのは、まず樹脂を生じる緑の木で、日本で豊富にある収集品で、各種の松や樅のようなものである。そして松属の名を区別なく呼び、様々なものの中でマツカサ（松笠）、アサマツ（赤松？）等と呼ぶ。それから同じく杉［スギノキ、クリポトメリア・ジャポニカ］、栂［ツガ］、それから椿［ツバキ］、優美な縁取りのある非常に長い葉のコナラの種類である［カシワ］、そして花のある木では、ほとんど常に梅［ウメ］や桜［サクラ］、どちらも八重の花の美しさで植えられるが、実は付けない。普通、桜、椿、コナラは自然の状態のままとするが、梅と緑の木は無数の異なった形にねじられる。緑の木に多用される方法で、それはラケット形に切られた最後の葉以外、完全に葉を落としたかなり離れた小枝しか残さないように枝をおろすことにある。同様に合わせられた木は筆状で終る宝棒のように思われ、間隔をおいて植えられた柄のついた長いラケットの中にあった。小さな木に関して、中国で見たコウノトリや花篭等の形に変えることは一般的でないが、あらゆる種類の形を作り出す。しかし、これは日本人の好みからなされるもので、小さな花瓶に二、三ピエの高さで、よじれて発育の悪い樅や乾燥して虫に食われた古い幹から分枝した梅の花の小枝があった。日本人は奇怪な植物を得ることに、非常な時間と忍耐を費やし、それにはいつも高い値が付けられる。そして値段はその見事な成功と同様にとても高い。一般的にその小さな庭にはほとんど花がない。しばしば見られるものは白や赤の素晴らしい牡丹［ボタン、ポエオニア・モタ］、様々な種類の見事な菊［キク］、日本に唯一あり、いくつかの種類の非常に注目される百合［ユリ］である。礫土と小さな盥が鑑賞用の庭で主要な役割を演じる。あらゆる庭はその名に値し、しばしば二、三ピエ[90]しか高さがない小さな山と小さな池があり、浴槽のような大きさで水の流れを維持し、いくつかの金魚が暮らしている。小さな円柱や大きな石の上に、お決まりの石灯篭を加えれば、日本家屋の庭に近づくと思う。

それでも日本人は花の大きな愛好者である。市場や家ではどこでも見ることができ、それらは一般的に箱や花瓶に植えられ、そして家の廊下に置かれる。時々、装飾的な植物としてありきたりの野生種が使われることになり、とりわけ、私は非常に美しい磁器の花瓶に素晴らしいアザミの一株を見て楽しんだ。日本人は自らヨーロッパ原種の植物を探した。このようなことは、私が新潟を離れる時、この町の住民は我が庭のキャベツに熱中した。実を言うと、この国では最初に見られるものであり、新しいものであった。まだ町や村の郊外の家には、花瓶、ミラノのキャベツ篭、ブリュッセルの牛肉の真中等へ丹念に植えられた一株のキャベツもなかった。それらが道沿い全てにあり、特に花を付ける時には、住民を賞賛させた。この酔狂を説明するには、日本にはキャベツ種が

ないことを言及しなければならない。アブラナ科の菜種［ナタネ］、そして大きな大根［ダイコン、ラファヌ・サテバ種］種しか耕作されない。その上、この二種は大規模に耕作されている。

VI

神聖な場所　オミガ・高貴な寺　僧侶　有料の儀礼　イエヤス（家康）の墓　お守りの商売　ほかの寺と墓

庭の装飾を再び見るために通過した時、日本の官吏と言われる人物の訪問が知らされた。それは白髪頭の男で、慣例的な平伏の後、私にオミガ（お宮）［高貴な寺］を訪問する希望があるかと尋ねた。私はその目的で来て、翌朝の早い時間にこの素晴らしい場所を訪問するつもりであると答えた。私の意向を受け、そこへ導くと言い、私はそれを受諾した。休憩の時、私にパスポートを所持しているかとさらに尋ねた。あるにはあるが、今市村の荷物とともに置いてきたと答えた。この男は何も見ることなしに帰ったが、密偵と案内人を兼任する当局の密使であることを推測することは容易であった。

翌日、五月二十一日、早朝に私を連れに男は正確にやって来た。多くの旅行者や、この地に住む外国人までも引きつける有名な寺の方へ、私は彼に続き急いだ。

小さな急流で分けられたこの村の上部全域は、小さな山の斜面全域に広大な囲いが占めていた。そして我々は村道のはずれにある橋につながる大きな入口に入り込んだ。この横には隣接する小さな礼拝所のための特別な使用に用意された二番目の橋があったが、それはかなり興味深い形をして、橋床はっきりと凸状で、ほぼ半円形であった。一般的な日本の橋のように、驚くような三メートル以上の高さの柱を形成した石塊で支えられ、それ自体の重みでバランスが維持されていた。三十五から四十メートルの幅が広くて長い通りが、緩やかな坂で山の斜面にすり鉢状に建つ寺の方まで登っていた。この通りの両側には大石の支え壁と外壁が続き、前日に道沿いで見たよりも古くて大きい松林が全域を厚い陰で覆っていた。通りの上で、大きな砂利で覆われた広い前庭のようなものに出合い、花崗岩の敷石の道を通り、その左右には豊かな彫刻と金箔の施されたおそらく人々から奉献された小さな寺と礼拝所を見た。そこには花崗岩の石段があり、上方にある同様に砂利で覆われ、小さなパゴダを囲む二番目の前庭に続いていた。案内人は一枚板で長方形をした石の水槽に私を注目させた。これは横が四メートル近くで、縦と高さは一メートル半あり、山の源泉から水が人目につくことなく引かれ、この水槽を満たし、滝へと流れ込み、あらゆる寺の入口で供される清めの水を巡礼者達に供給した。隣接する台の上には、本当に巨大な金銅の驚くような清めを認めたが、それは急ぎ作られた東屋に保護されていた。それは前世紀のヨーロッパ趣味で、非常によい細工がなされていた。案内人はそれがオランダ人により贈られた物だと言った。そこで私は実際、十六世紀末から解体まで、インド・ネーデルランド会社

の支店が長崎の近くのデジマ（出島）にあり、その交代した大使が毎年江戸の将軍［大君］に贈り物を贈る義務があったことの記憶が蘇った。

美しい大きな石段を登った後に、全面が囲われた入口の扉とその中央に扉で閉じられた主要な寺があった。そこは儀礼に関係したもので、民衆はこの神聖な囲いの中に入ることを認められなかったが、少なくとも外国人には特権が必要であり、それは金を払ってしか得ることができなかった。すでに案内人はお宮を訪問する際の許可には一リョウ（両）イチブ（一分）［およそ六フラン半］かかると私に伝えていた。二人の使用人もこの契約により私に続いて入ることができた。案内人は私に少し待つように言い、そして僧侶長に通告したように思われた。すぐ後に、黄色の長袖の長い着物を着て、頭にフリジア帽の形をしたとても小さな黒い帽子を被った人達が到着するのを私は見た。彼らは囲みの扉を急いで開け、そして案内人が求める金額を手渡したので、中へ入る時が来たと思ったが、儀式はまだ終っていなかった。まず傘を置いて、靴を脱ぎ、与えられた藁のサンダルに履き替えなければならなかった。それから紙とインクを備えた僧侶がやって来て、私の訪問に関する情報と思われるものを書き始めた。そして案内人にその証書の写しを与えた。この儀式全てを見るのは初めてであり、一般的に、僧侶は与えた金額をいとも簡単に受け取るが、重要な場所であることから考えて、日光では管理上行われていることのようだ。代書人が象形文字で紙を覆うために奮闘する間、私は目の前にある寺の観察に没頭していた。この光輝きそして不思議であるのと同時に素晴らしい東洋の贅沢以上のものを想像することは困難であった。私は非常に傾斜した広大な屋根で覆われた四角い形の建造物に向き合っていた。それは屋根から土台まで文字通り金箔であった。どの点でもヨーロッパの建築には似ておらず、常に全体が木製で、実際にはとても大きく贅沢な骨組みで形成され、もし可能なら日本寺院建築と建築名を与えることになる。その上、私がすでに訪れた全ての寺で、その配置はどの点でも相違いがなく、大きいものでも小さなものでも、全ての寺は同じ形で建てられ、そしてその中で彫刻と金箔の贅沢さはほとんど違いがなかった。ここで、建造物の外側全体を覆った無数の金銅板は赤い基調の寺を鮮明に際立たせ、その輝きは目をくらませた。

ようやく前庭に進んで、私は建造物の周囲となる外側回廊を数段上に見た。この回廊の床は豪華な箱と同様に、とても美しく繊細な黒漆で完全に覆われていたので、私は足にサンダルを履く必要性を理解できた。大きな門は聖域内への通路となり、板の二つの扉は繊細な透かしの彫刻があり、各種の鳥や植物が表現されていた。そして全ては漆塗りと金箔であり、素晴らしい嗜好のものであった。内部は二つの大きな回廊で形成され、その一つは直角に達するもので、もう一つは真中がT字のような形のものであった。この内部は筆舌に尽くし難く、驚くような華麗さがあり、床を含む全ての仕切り

は最上の美しい漆で覆われ、その絵画と彫刻は建造物の極わずかな細部までも飾っていた。天井は彫刻で細工と金箔により、四角く浮かび上がり、それぞれが絵画の集合で埋められていた。大きな絹の壁紙は、厚い縁取りで壁から浮かび出て、額に入れられた肖像のコレクションが全周に配置され、おそらく家康一族である各将軍を示していた。二つの回廊と地上に配された各種の信仰への徽章と紋章があり、特に、大きな実物大の蓮は茎と葉が金銅で、大きな白い花は銀、おしべが金であった。これは日本人がハチス（蓮）あるいはレンゲ（蓮華）と呼ぶ、よどんだ水辺で生育される睡蓮の種類を正確に写したもので、実と特に根は日本人に食料として珍重される。それらは美しい白い花から装飾植物として栽培された。大きな葉は楯形とコップの形で窪んでいて、パラソルに使えるような大きさで、静かな水の表面に漂う時、非常に美しい印象を生じる。寺の回廊の中にはまた金銅と銀の実物大の白鳥があった。白鳥［ツル（鶴）］は日本人が敬愛する鳥であり、それは長年生きると考えられることから、まるで幸福な長寿の象徴とされる。

それから私は外側回廊により建造物の周囲をまわり、そこで等しく彫刻された外部のあらゆる木工細工を見た。全ての稜と角は紋章と図案が刻まれた上に金銅の薄片で保護されていた。私の視察は終ったが、日本の立法者であり、一八六八年までその手に権力を保持し、この時期に現在君臨するミカドの一団により最後の代表者が江戸を追い出された現実の大君による帝国の創立者である家康の墓を見ることを希望した。初代の家康は本当に稀に見る人物で、政治的に奥深く、辣腕な武将であったと思われ、無数の困難の中、唯一その功績により帝国の尊厳を高め、そして封建体制の不和を破り、この国に依然続く平和と繁栄の時代を与えることができた。一六〇三年には世襲のセイダイショウグン（征夷大将軍）［いわゆる蛮族の仲介者で軍隊の総司令官］の称号を受けた。聖フランソワ・ザビエルはその人生の最後まで、忍耐強く、ともかくも公然と布教を行い、その継承者により十六世紀末には日本全国に広められたが、家康はカトリック教の敵であった。一六一四年には明確に禁止した。教会を倒し、この国に隠れ住む十八人を除いて、全ての宗派を日本から追い出し始めたのは同年の十月十五日のことであった。家康は一六一六年の三月八日に死去し、その命で日光の山の中に葬られた。それが私の見に行く墓である。この墓は山の斜面に位置し、かなりの距離があったので、この散策をするためにはまた靴を履くことになるが、御陵まで導く石段に着いた時には、またそれを脱がなければならないと思われた。漆の床の上で滑るかわりに、濡れた舗石の上を歩いたので、今回は不快に思われ、数分で足が濡れた。石段は非常に固く、百五十段以上があり、両側にある石の欄干が注目された。そして大きな透かし細工の石造物が多くの場所にあった。私は完全に息を切らして、上へと到着し、そこには家康の墓があった。それは一辺十から十二メートルの四角形からなり、大きな舗石で覆

われ、そして古美術品である証拠として、歪んで曲がった錬鉄の格子が取り囲んでいて、その極端な簡素さが注目された。その真中に何の装飾もない花崗岩の御陵がそびえていた。ただわずかな距離の所に、すでに寺で見たのと同じいわゆる蓮と白鳥の紋章があった。だからそこは森の静寂の中で、二世紀半昔から同じ木の根元は日本の最も偉大な軍人で最初の立法者が眠る場所であった。木陰に守られ、山中でその重要性を忘れ、そして壮大への倦怠から、生涯を甘受した静寂の時を唯一味わうのはおそらくこの場所であろう。そしてとても涼しく緑が豊かで、歓待された同じ場所に墓地を選んだ。その子孫である六、七人の将軍はその例を継ぎ、彼らの墓を同じ囲いの中に分散してあった。

私はすでに訪れた寺の方へ再び降りた。私はその隣接地に、全てがまるで本当の宝石のような彫刻と漆と金箔が施されたいくつかの小さなパゴダがあるのを認めた。それは金属の柱の上に置かれた全てが二メートル以上に統一された高さの青銅製の見事な灯籠の森に囲まれていた。この種の灯籠は主要な寺と君主の墓に許された豪華さである。豊かでない寺では、個人の家と同様にあまり大きくない石灯籠がある。私は寺の周囲に、また非常に大きな青銅製の花瓶を見たが、それは鍍金の装飾で文字が施されたものであった。これら全ては、多くの臣下から奉納されたものであり、ほとんど全ては彼らの悲劇的な伝説を有するものであった。私は縁に刀の打撃が刻まれた非常に大きな青銅製の見事な花瓶に注目させられた。どうしてこんな破壊行為が？　私にはその理由が解らなかったが、一プス[91]の深さで金属の輝きを奪ったこれらの切り口を見ると、勇士が頭部を盗むのと武具を一刀両断するために行ったこの多くの刀傷で、私は日本にたくさん存在するある物語に信仰の歴史を付け加える強い気持ちになった。それに比べて、昔、我が宮廷の中庭で行われたサーベルの一突きは子供の遊びでしかない。

その後、私はまだ全てを見ていなかったが、案内人は私にほかにも素晴らしい寺が多くあると言った。私が最初に訪問したものより素晴らしいのだが、しかし、それを見物するには、また財布の紐を緩め、散財をしなければならなかったが、その値段は安くなった。そこで私はそれを実行し、素晴らしい森を通り、かなりきれいな峡谷の斜面を通過して、上方の巨大な新しい階段に着き、私は確かに最初の寺と同様な素晴らしい大寺院を見た。細部の軽い違いを除いて、彫刻・漆・金銅・壁掛け・青銅等の豪華さは同様であった。私の視察は終わり、私は来たのと違う道をとり、そして間もなくいくつかの小さなパゴダに囲まれた三番目の大きな寺の存在を認めた。また案内人から拝観料についての新しい呼びかけがあり、今回はささやかな金札二枚であった。私の興味が満足し、感激があまり強烈でなくなったのに応じて、料金が安くなったのは明白であった。今度の寺は非常に美しかったけれども、前述のものとは違い、豊かに飾られたものではなかった。そして私には宗教儀式の時だけのものに思われた。ちょうど

私がそこへ入った時、聖務が開始され、祭司職の装飾の服を着た僧侶達が、祭壇のまわりの大ろうそくに火を点け、行ったり来たりしていた。この寺は仏教の宗派に見えたが、ほかは神道の宗派に思われた。私が出発するつもりになった時、二人の使用人と僧侶が大がかりな会話をしているのを認めた。それに近づき、彼らが書かれた文字を囲んだ絵が上にある小さな紙を買っているのが見えた。彼らはそれが幸福をもたらし、不幸を追い払うお守りであると説明した。小さな紙は値段がわずか一テンポ［一スウ以下］であった。彼らは各十二ずつそれを買った。何で彼らは確固とした信仰をもたないのか！　わずかの金で、それは生涯の幸福を保証するのか！　この小さな紙が信者に幸福を与えないとしても、訪れる群衆にそれを売り、僧侶には多くの金をもたらしていた。事実、私の視察の時も、寺に興味があり、過去の思い出と将来への保障としてお守りを持ち帰りたい集団にしばしば出会った。これらの各集団は年齢、性別に関係なく、四十人ほどの人々で構成され、彼らが見物するものを説明する案内人に導かれていた。しかし、彼らは寺の中やそれらを取り囲む約束された空間の中へ入ることを許されていなかった。突然として、私の前にある全ての門が開いたので、彼らはかなり驚いたようだ。おそらく、訪問者達は私が金を払わせられたことによって、大貴族に遇されたとしか考えていない。おそらく、彼らはわずかな金しか払っていなかったが、我々とともに中に入ることができた。

かなり興味ある寺と墓の詳細を訪れた後に、全体の風景を楽しむことができる丘の上に身を置いた。そこで眺めた景色は本当にこの世で雄大かつ独特のものであった。これを見ることがなければ、金に輝き、輝く銅の装甲のあるこれらの寺が生み出す効果が、山を覆う広い緑の真中に分散し、そして偶然に投げ出されたようになることを想像することは困難であった。大きな階段やパゴダの小鐘楼と大きな欄干が茂みの中で交互に見え隠れし、時々、大きな松の枝が金色の棟しか認められない寺の正面を覆い隠した。各大寺院のまわりでは墓と礼拝所の一群がまとまってあり、それら全ては階段状に並んでいた。そして偶然のように、山の変わりやすい曲線に従っていた。透明な水の小さな急流が風景の真中で滝となり、落ちていた。私はどこにもこのパノラマと比較し得るものを見たことがなく、そして時間が経過し、道を戻る時間になったことを思い出さなければ、午前中それを観察するために止まっただろう。その周辺にはまだ見るべき美しいものがあり、日本で最も高い頂上である日光山[92]、底なしの深い滝壺にほとばしりそそり立つ急流の源、そして山の上方にある素晴らしい湖[93]、ほかにもまだ！　私が旅を始めてすでに十一日目になっているが、まだ五十リュウ以上が残されていた。誘惑が多く、私の足はあまり疲労感がなく、パンだけしかないが、全てを見るためにもう一日だけ日光へ留まろうと思った。しかし、全てを訪れるには二十リュウ以上の距離があり、残念ながらすぐ後に余暇の小旅行をするには都合のよい時期ではな

いことをようやく悟った。そこで、私は旅館までの道を果敢に戻り、素早く荷物の準備をさせ、そして旅館で休憩をとった。おそらく、あと二、三日間私の財布を生活の糧とすることを計算していた案内人は、私とすぐに別れることの哀惜から、ため息をついた。

Ⅶ

木の焼灼法　ジンリキシャ（人力車）の旅　野菜・魚・果物　目の神　日本における目の病気の頻発　富岡への到着

アサマ（浅間）火山　江戸

今市へは昼食時間に着いた。私はパスパートを求める役人が入ってきたのを見て、すぐに食卓の前に座らなかった。私は急いでそれを提示したが、役人はそれで満足せず、確認と記録をするために、その町の事務所へ行くことを望み、三十分後に私を随行させた。前日に預けた荷物を受け取り、南の方向へ街道を再び進んだ。そして数時間後、新しい中継地となるイタバシ（板橋）村[94]へ到着した。夜六時頃、フルガワ（黒川か？）を渡り、その少し後、宿泊することになるカナエ（鹿沼か？）村[95]へ到達した。日中、前日に見たものと著しい違いはなく、この地方に関して特に記録することもなかった。しかし、日光から黒川まで、街道の両側には、日光のものとほとんど同じくらいの大きさの松が配置されていた。私は穴のあいた多くの木の幹を認めた。その木はまだ発育がよいにもかかわらず、穴の内部全面は火で黒焦げにされていた。木が腐り、滅びる徴候が始まる時から、この病気を止めるため、日本人により用いられた方法である。実際、植物に実施した外科手術と言う以外の何物でもない。木のカリエスあるいは傷と呼ばれ、焼鏝をあてられ、全ての病気組織を破壊し、分離され守られた正常な部分への悪い導体層になるものを、炭の状態にした。その上、これは日本人が地面に打ち込まれた杭の表面を焼くのと同じ目的で、地面に打ち込まれた部分が湿気の影響をあまり受けないことと早く腐らせないことにあった。

翌朝、五月二十二日、六時半頃に鹿沼を離れた。しかし、今回は徒歩の旅でなかった。もう越える山もなかったが、実際に疲労を感じ始めていたので、ジンリキシャ（人力車）あるいは小さな手押し車が通行可能な道を利用した。この地方はいつも非常に美しく、ほとんど起伏はなく、かなり美しくなった麦畑で覆われ、木立はまた非常に珍しかった。オグラガワ（思川か？）を九時頃に渡り、そしてトチキ（栃木）[96]へ十一時半に着いた。栃木町はかなり大きく、そしてとてもよく維持されていて、かなり重要であり、前の時代まで、この地方の中心地であった。私の勧告にもかかわらず、車引きは全速力で走ったので、その詳細を認めるには速く通り過ぎた。町や村をとても早く通過し、力強さと軽快さを示し、住民の注目を引くことが、実際に彼らの自尊心であった。

かなり活気があり、家畜で混雑した広く長い通りに従った後、私は慣例により、宿駅事務所で多少長く待たされたが、

しかし、これはどうしようもなかった。かなり老齢の男が私に会いに来て、丁寧に挨拶した後、車引きに後へ続くように言ったが、それは私が休憩することになるのが、彼の家だったからで、明らかに、この男は私の到着を待っていた。そして前日に今市で、私のパスポートをよく調べた役人が急いで、栃木の役所に私に関する報告をしたのは確かであった。日本国内を旅するには、地方の警察から人物の概略を把握されることになり、特に外国人に対しては、絶えず監視と調査が行なわれることになった。さらに、この調査が完全に日本の習慣であると知った時も、何の驚きもなかった。しかも、我々が得た案内人はわずかな詳細にしか通じていなかったので、それは不都合というより、むしろ有利なことであった。昼食のために車を降りた旅館は、かなりよく整えられていて、この地方のあらゆる快適さが提供された。日本人は世界で最も料理の嫌いな人々であり、反対にかなりうまく甘い菓子を作ったので、そこにも同様にかなり注目されるような菓子の盛り合わせがあった。

栃木町のからトミダ（富田）村[97]までは、約二リュウ以上の距離があり、私は完全に麦畑で覆われ、ボース[98]の一隅と思われる平野を通過した。それは南方にかなり遠く広がるように見えたが、西方は山脈でふさがれていた。私はその支脈をわずかな距離でたどった。広大な麦の耕作であるが、この地方の人々にとって、米が食料の基礎となることは疑いなく、主要な食料の中には、麦［コムギ］、大麦［オームギ］、蕎麦［ソバ］、エンドウ豆［ササゲ］、ソラ豆［ソラマメ］、インゲン豆［インゲンマメ］があるが、菓子やつけ合わせとして、あらゆる方法の料理に重んじられている。日本人は米の食糧で満足しているか解らないが、また米の品質を強く求め、その地方の米しか受けつけず、実際、シャム、フィリピン、コーチシナのものよりも素晴らしい品質である。また時々、それが欠乏する時もあるが、日本の人々は中国から輸入した米を拒むか、渋々食べる。それでも米のほかに、繊細なものはほとんどないことは間違いない。その上、食生活は海岸部と内陸部の住民とではわずかな違いがある。日本沿岸はあらゆる種類の海産物が世界中で最も豊富にあるので、海岸部の人々は魚や甲殻類や貝類のようなものを多く消費する。その中には、ヨーロッパの種類の鯖［サバ］、鱈［タラ］、鰹［マグロ］、鮪［イルカ］、平目［ヒラメ］、エイ、鰯［イワシ］、鰊等のほとんどがある。特に日本の海では、ほかの種類が多く、すでに引用した鯛のように非常に繊細なものと漁師によく知られる有害な種類もあるらしいが、私はまだ見たことがなかった。結局、日本人は毎日市場で見た鮫までを利用したが、一般的に小型のもの［サメないしはフカ］であった。甲殻類は主にオマール海老［クルマエビ］の小さな種類、非常に大きなものも含むいくつかの海老［エビ］の種類、時々、驚くような大きさに達する蟹［カニ］がある。軟体動物類にはあらゆる

種類の貝類があり、その中で最も一般的なものはアサリ［ウムギ］ないしハマグリ］、牡蛎［カキ］、鮑［アワビ］、それと同じくあらゆる種類のイカ［イカ］、そのいくつかは非常な大きなものがある。それとすでに問題にした鯛と鮭のことを付け加えなければならない。北部地方の海岸部の住民は、ある種の海洋植物を消費する。その主なものは大きな昆布［ヒジキ］の種類、アイスランドの苔類のような苔［ミル］の種類、その他にモズクとカジメと呼ばれるものがある。

要するに、海は海岸部からあまり離れていない人々に、多量の食料を供給する。内陸部の住民に関しては、大きな手段を奪われ、そして米にわずかな塩漬けの魚といくらかの野菜しか加えることができなかった。川も非常に魚が多かったのだか、取るに足りないものしか供給することができず、そこで特に川はどんな法律も実行を支配できないような多くの釣り人で一杯にしていた。淡水魚の種類の数はあまり多くなく、その主なものは鯉［フナ］、鱒［ヤマメ］、いくつかの品種の鰻［ウナギ］、すでに引用した白い魚［アユ］、その他にあまり大きくない、黒くそして胸部の鰭が武器のような爪の持つ不快な外見のものがある。［カジカ］

海産物の欠落と欠乏から、内陸部の人々は大地の生産物にかなりの貢献をさせなければならなかった。すでに引用した彼らが使う穀物と野菜には、サツマイモ［サツマイモいわゆる薩摩の国の根］、茄子［ナスあるいはナスビ］、根を食べるカリブのカブ［サトイモ］、その茎の葉［イモガラ］、栽培されて長い根を食べるワセスイバ［ゴボウ］、野生の状態で成長する植物で、日本人はその長い根をかなり評価する［ナガイモ］を加えなければならず、最後に、我がジャガイモは到るところで栽培に成功し、一般的に使用される時はそう遠くはなかった。

果物に関しては、オリーブとアーモンドを除いて、日本では主に北部地方ではあらゆるヨーロッパの果物があると思われる。まず日本人が最も評価するのは冬の大きな梨［ナシ］の種類、大きな漿果の柿［カキ］、シャスラの品種の葡萄［ブドウ］であり、そして中央と南部地方には、粗悪な種類のマンダリンオレンジ［ミカン］、次に栗［クリ］、桃［モモ］、杏［アンズ］、それにかなりおいしい小さなメロンの種類［マクワウリ］がある。林檎［リンゴ］、梅［ウメ］、ザクロ［ザクロ］、胡桃［クルミ］、花梨［カリン］、それに無花果［イチジク］はあまり評価されていない。サクランボ［サクラ］は野生種で、非常に苦い味があり、ほとんど食用として用いられない。また日本人が唯一食用種子の例である胡桃の核果をほとんど食べないことが注目された。胡桃の木は森の中にたくさんあったが、その果実はほとんど収穫されていないように思われた、私はまた森の中でハシバミの木に出合った。しかし、この地方の人々はその品種名も知らず、私がその果実を食べるのを見て、とても驚いたが、彼らはそのようなことを考えたこともなかった。果物と栽培された野菜のほかで、地方の日本人はまた多くの野生種を食べる。その中には十字花弁の二

種があり、その一つはすでに述べたが、ミズナと呼ばれ、そのほかはシソとヒヨドリバナ［フキ、ナドミヤ・ジャポニカ］がある。そのほか百合の球根、生姜の根［ハジカミあるいはショウガ］、ほかにもまだあるが、私はその正確な名前を知らず、いくつかはしばしば日常的なスープに使われた。その上、その夜、宿泊することになった小さなサノ（佐野）町[99]で、私はまた同じ種類のポタージュが提供されることになった。しかしながら、本当のご馳走を作るため、若鶏を見つけて買えたのは、旅を始めて以来、初めてのことであった。実際に日本人は家禽をほとんど飼育しない。多くの家の鳥小屋には、鶏しかいない。それらは食用よりも鑑賞用の方が多い。それは非常に小さな種類で、さらにかなりきれいなものを選ぶように気を付けられたが、普通、鳩よりも大きくはなかった。そして常にこの鳥は全部白色か全部黒色ないしは同じ様相の色調の羽毛があった。シャム王国起源で日本に輸入されたかなり大きなシャモ（軍鶏）と呼ばれる別種類もあった。

五月二十三日、私は朝五時半頃、佐野を離れた。ワタセガワ（渡良瀬川）を通過した後、七時少し過ぎに、ヤナダ（梁田）村[100]へ到着した。宿駅の入口に座り、後方に残る荷物を待っている間、正面にある本当に小さな礼拝所にお参りに来た数人の土地の商人に私の注意が引かれた。信仰する方法はいつも同じであったので、私に興味を持たせたのは彼らの作法ではなかった。寺の前にいる彼らは、そこの神の加護を引くつもりで、門の前に特別に吊るされた大きな鈴を鳴らして、その注意を引くことから始めた。それから、手を叩き、そして大きな玉座（賽銭箱）の中にいくらかの金を投げ、立ったまま祈り、そして引き下がった。私は特に礼拝所の特別な装飾と医師でおまけに専門医である神の滞在を示す銘文に興味がそそられた。専門は目の病気を治すことであり、眼科医であった。実際、門の上には［ヤクは薬、シは師、それとニョライ］の文字が書かれていた。後の言葉はアミダ（阿弥陀）、シャカ（釈迦）等のような仏教の主要な神の称号が与えられていた。だからその銘文は患者に最もよい薬をわざわざ教える［僧侶を通じると思う］ニョライ（如来）と呼ばれる大神のことを示していた。礼拝所のまわりには板の奉納額が下げられていて、一つはその治癒に感謝する人々を示し、もう一つは目を表わす大きな図案だけで覆われていた。同じく時々、目は図案の代わりに、目［メ］を意味するヒラカナ（平仮名）の文字で表現されていた。この文字は二つの目を真似て、隣に並べて配置されたが、左目を示すために右の文字と逆にされた。

日本国内を旅する者は誰でも、特別な眼科の神がいることに驚かされない。私は目の疾患が非常に一般的で、とても重大事項となる地域を見たことがなかった。［少なくとも日本人の医師の手には］地方の町中では、また非常に多くの数のあらゆる年齢と性別の盲人に絶えず出会った。彼らの角膜はほとんど曇っていたが、行動するためには十分に見えていた。しかしながら、多数の疾病の治療を納得することができ、

そのほとんどは始めの治療が単に硝酸銀、硫化銅、硫化亜鉛の目薬の点眼や塩化第一水銀の吸入法のようなより簡単な方法に委ねられた。ほとんどの場合、最初に眼瞼炎、すぐ角結膜炎と続き、しばしば複雑な逆さ睫毛となる。もしこの病気をそのまま放置するか、処置が悪ければ、間もなく角膜に潰瘍と白斑を生じることになる。私はまた多くの白内障を見たが、もしこの病気をそのまま放置するか、処置が悪ければ、間もなく角膜に潰瘍と白斑を生じることになる。そして重大な炎症の発生により手術はほとんど稀であった。多くの失明の場合はかなり一般的な伝染病である天然痘や麻疹で突然起こった結膜炎の結果である。目の病気の頻発から、とても小さな集落まで、メクスリいわゆる目の薬という文字の広告を至る処で目にした。しかし、その話題の薬では稀にしか治癒せず、もう彼らが後押しをする眼の神すがりしかなく、両方とも人々の非常に大きな信頼を妨げることはなかった。

オオタ（太田）[101]までの道はかなり良かった。太田は小さな美しい町で、豊かに耕作された平野の真中に位置している。ちょうどマツリ（祭り）というこの地方の祝祭日で、すでにそのことは、遠くからでも解っていた。晴れ着を着た大勢の農民に出会い、家の表には白い旗が広げられていた。この旗は白い布の長く大きなもので、竹や旗竿に張られ、そして大きな文字で標語が記されていた。太田に入った時、通りは群集で混雑し、子供の玩具と菓子を売る小さな商人達が遠慮なく、道の真中に商品を広げていたので、それをかき分けて進むのは大変であった。派手な色彩の服装は特別な模様があり、多くの人々の祭りの衣装は興味深いものであった。日本の群集の服装は一目でヨーロッパのものより遥かに雑多な色彩を示していた。同様に注目すべきことは、ヨーロッパで普通に聞こえる呆然とさせるような凄まじい騒音に比べ、この大きな集団の人々は静かに沈黙している。私には日本人達がこの公式の祝日を本当に楽しんでいるのかは解らないが、おそらく祭りの場へ行くことを急いでいるものと判断された。だが、いずれにせよ、彼らはその印象を裏切ることがない。昼食のために立ち寄った旅館は人々で溢れていたが、小さな庭に面した非常に美しい部屋が提供された。その部屋は分割されたほかの部屋に囲まれていて、この部屋はおそらく特別室に相当するものであった。天気は非常に良かったので、部屋には障子がなく、従って、私を含めて全ての飲食客は同じ部屋に集まることになった。新しく到着した客は来た時の場所で、畳の上に座り、周囲を気にすることなく、茶碗に盛られた米を食べ始めた。各人は自分の家のように振る舞い、男達は酒を飲み、タバコを吸い、あるいは寝た。母親は乳飲み子の所にいたが、人々は全く言葉を交わすことがなかった。昼食を終え、再び旅路へと着いたが、また祭りから帰る多くの農民と出会った。道の途中では、午前中に始めて桑畑に出合い、注目していたが、その数が段々と多くなっていた。実際、私は日本で最も絹を生産する地域へと入ったのである。キサキ（木崎）[102]・サカイ（境）[103]・ゴリョウ（五料）村[104]を次々に通

過した。そしてヒロシガワ（広瀬川）とトネガワ（利根川）の二つの川では、渡し舟で川を渡らなければならなかった。利根川は非常に流れが早く、川幅はかなり広かった。その渡航は少し時間を必要とした。その右岸には五料という小さな村があり、私がそこを通過した時、長い建物の二階の窓から大勢の女達が顔を出しているのを見て、かなり驚かされた。それは製糸工場で、女子工員たちは我々のキャラバン隊に興味を示し、見物するために、盥と糸繰り機の仕事の手を止めた。宿泊するためにタマムラ（玉村）村[106]に着いたのは、六時近くになっていた。この町は非常に清潔で、よく手入れがされていた。私は太田以来、すでに気が付いていたが、余裕と繁栄の空気が発散されていて、それは山国の村の貧しい外観とは際立ったコントラストとなっていた。人々の幸福感は養蚕地帯では一般的なもので、最も貧しい階層でも困窮することがないと言うことができた。

翌五月二十四日、玉村を六時半頃に離れ、カラスガワ（烏川）を渡った後、シンマチ（新町）村[106]に到着するには、時間はあまりかからなかった。そこは江戸から高崎へ行く道を右へ曲がり、西へ向かった。富岡工場の業務のために、皇后により前年に開通された新設の道路を私はたどった。この道路は私が日本で見たものの中で最もすばらしく、一年の中で、この時期は想像を越えた美しさで、収穫期の明るいクリーム色に、深緑色が目立った桑の生垣に囲まれた大麦と小麦の小さな畑に覆い尽くされた見事な平野の中を通っていた。村の集落は大木の木立であらゆる方向から半隠しされているように見えた。この平野は西の方向の視界を遮っている山麓まで緩やかな勾配で登っている。日本の火山の中で最も興味深く、そして絶え間なく活動しているアサマヤマ（浅間山）の頂上が高くそびえていた。

私は間もなく河口のように平野に集まる大きな谷の中へ進入した。この場所から、道は西へ向かって、少しずつはっきりと登っていて、そして小さな川の右岸をたどった。ヨシ（吉井）村[107]を通過した後、十時半頃に富岡村に到着した。そこで私は製糸工場の人々に自己紹介をした。首長とその家族は三日前から、横浜へ出かけていて、フランス人の使用人[108]に私宛の手紙を託し、私が自由に使える家を用意するように命じていた。使用人は私に共同住宅を指示し、急いで昼食の準備をした。それはもちろん素晴らしいご馳走ではなかったが、フランス式の正式な食卓に着くこと以上の満足感はなく、副菜に包まれた鹿の腿肉の食事に向かった。ここ二週間は鶏や魚類なしで、卵とキノコと野菜だけで過ごし、一週間前からはビスケットしかなかったが、また再び肉と白いパンを十分に味わうことができた。昼食のすぐ後に、私はこれから住むことになる場所と私に健康を託した人々を調べるために外出した。富岡工場は小さな川の左岸で、同名の村はずれの大きな谷の中に立地している。製糸工場の模範工場で、三百の洗い桶の仕事場を有し、そして全ての建物はこの産業に必要なものであった。人員はヨーロッパ人首長と数人の日本政府官僚

と五百人の女子工員で構成されていた。女子工員は日本のあらゆる地方から官公庁の世話で選ばれて、一、二年間、この施設で過ごした後に、彼女達は取得した製糸技術についての知識を広めるため、国へ戻る。富岡工場は完全にヨーロッパ式で運営され、そしてフランスから来た職工長と女教師らの指導者による監督の下で設立され、男女の生徒が訓練された。糸繰り機の動力はヨコスカ（横須賀）工廠のフランス学校で養成された日本人技師[108]により運転された蒸気機関から供給された。燃料は近隣の鉱山から、あまり品質の良くない亜炭や木質化石が運ばれ使用された。

富岡周辺はとても趣のある土地で、木が多く、東から西へと大きな山脈と結びつき、その中でも雄大な浅間山が浮かび上がっていた。浅間山は非常に興味深い火山で、私はまだそこを訪れる機会はないが、毎日絶え間なく噴火口から噴出される厚い柱状の煙を眺めていた。訪問した人々の報告によれば[109]、この種のものの中では独特のもので、滑稽なラッパ状の完全な形をして、直径三メートル以上の垂直な岩壁により成る底なしの裂け目から形成されていた。水蒸気と亜硫酸ガスとても細かい灰から成る厚い煙の渦巻きで、裂け目の底を見ることはできなかった。この煙は高く舞い上がり、かなり遠くからでも見ることができ、その噴出は絶えることがなかった。地下の恐ろしいうなりは話し声をかき消す力強さがあった。以上、火山が現在も続けている状態である。長年、被害はないが、それもせいぜい一世紀のことであり、江戸と横浜で頻発した地震を伴った噴火があった。この場合、浅間山の噴火口から絶え間のない水蒸気の放出は、おそらく安全弁の機能を果たしていると考えられる。

富岡の三リュウ半西に、シモニタ（下仁田）村[110]があり、素晴らしい繭の生産と少し離れたコサカ（小坂）と呼ばれる場所にある磁鉄鉱の鉱山[111]で有名である。私はこの非常に注目される鉱脈を訪れる機会を得た。それは非常に木の多い山の斜面で、かなり高い場所の地表に現われていた。その頂上部はおよそ一メートル八十センチあった。そしてとても強力な磁力の特性と結びつき、離れた所から差し出した手で持つのにも苦労する太い鉄のボルトさえも付ける強い力があった。この鉱物は非常に堅く、スウェーデンやノルウェーの有名な鉄山［タブル・ダンヌモラ・アルンダル・その他］のものと全く類似するように思われ、そして非常に良質である。［六十％～七十％］これまでに日本人は谷に転がっていた単独の断片しか開発を行わなかった。それは鉱脈が見える山の斜面が非常に傾斜していたからである。［およそ四十五度］しかし、政府は正式な開削を命じ、そして現場にイギリス人技師[112]を送り、すでに高い被覆材の建設が始められていた。鉱脈はイギリスピエ（フィートか？）で、四～八と異なり、まだその大きさは正確に知られていない。しかし、本体が数メートル以上あることは確実である。その上、鉄と石灰の鉱山で、重要な花崗岩・石灰岩・石綿のスレート・その他の鉱脈を含んでいる。職務と夏の暑さが、私にこの地域を理解するための十分な踏

査と研究を進めることを阻んだ。しかし、この研究は私の次の仕事に対する目的となるであろう。

翌朝、五月二十五日、私は服務規程を工場の首長と確認するため、江戸へ戻ることになり、富岡を離れた。新町へ到着し、前年の同じ時期に新潟へ行くために通った道を再びたどり、私はホンジョウ（本庄）[114]・フカヤ（深谷）[115]・クマガイ（熊谷）[116]・コウノソ（鴻巣）[117]・その他の村を再び通過して、翌五月二十六日、江戸へ到着した。

この地方については、前の報告ですでに述べ、再度繰り返さないつもりであるので、この部分の旅については何も述べることはない。

要するに、五月十日の新潟出発から、五月二十六日の江戸到着まで、十七日で百四十リュウを踏破し、十二日間は八十リュウを徒歩で行った。道中では、記憶を助けに、いくらかのメモを取り、数ページを書くことができた。私は江戸から新潟への旅の報告に対する温かい受け入れ以上の成功は望まず、それはフランスの友人と理解者に私を思い出させること以外の目的はなく、彼らの喜ぶようなものを探しながら、また私も彼らに利用されることが幸せであった。自然科学の視点からの外国の踏査は、最初から特別の困難があり、私は早くから彼らの親近感に感謝し、それを私がすでに獲得し、持ち続けることを強く望んでいることは解っていた。

トゥールーズ物理学・自然科学学会会報
一八七四年号
パリ（フランソワ・ミッテラン）国立図書館蔵

おわりに

幕末から明治初期に来日したフランス人医師は十数名に及ぶことが現在確認されている。これらのフランス人医師は明治政府が創立した産業施設や各地に設立された医学校などに勤務し、多様な活動の軌跡を残しているが、江戸期のオランダ医学並びに明治政府に採用されたドイツ医学の系統とは一線を画するため、フランス人医師の活動の実態について、これまで検討が加えられる機会はほとんどなく、横須賀造船所に勤務したサバチェの活動についてが唯一詳細に言及された例であった。

本稿で取り上げたヴィダルも新潟病院・富岡製糸場・横須賀造船所等を歴任したフランス人医師であり、その活動についてはこれまでほとんど注目されることのなかった人物である。筆者は富岡製糸場のフランス人技術団を追求する過程で、ヴィダルが日本で見聞した様々な事象をフランスの学会に報告している事実を把握したことから、その紹介を続けてきているが、現在、確認できているヴィダルの論考は十数編に及び、日本研究という面でヴィダルが非常に大きな足跡を残している事実を指摘できる。

このような観点から、ほかのフランス人医師達の活動を見

ていくと、彼らもその豊かな博識を背景に、日本の事象についての研究を積極的に推進しており、その業績は計り知れないものである。現在はその意義を再評価する時期にあり、今後さらに彼らの活動の詳細について、検証を試みたいと考えている。

本稿を作成するにあたり、筆者は翻訳経験が浅いため、仏文独特の言いまわしについて、本訳文は十分に完成した文章とは言い難く、今後、そうした部分について修正を加えながら、完成を目指していきたいと考えている。

なお、末筆であるが、フランス語・フランス文化について多くの教示をいただいてきたパスカル・モンジュマタンさん（Pascale Mangematin）に感謝の意を表する。

註

（1）石田幹郎『蘭学の背景』一九八八
明治初期に各地に設立された医学校で、オランダ人医師の勤務しなかったものの多くは廃止されていて、オランダ人医師により実施された医学教育が、その後の学校存続に大きく影響していると石田氏は指摘している。なお、ほとんどのオランダ人医師はユトレヒト陸軍軍医学校卒業者であったが、新潟病院に勤務した三人は数少ない同校出身外の医師であり、この点が新潟病院の特徴をさらに際立たせている。

（2）新潟大学医学部学士会『新潟大学医学部七十五年史』上・下　一九九四

（3）拙稿「富岡製糸場の通訳―幕末・維新期のフランス語教育―」『群馬文化』二四八号　一九九六
拙稿「富岡製糸場のフランス人医師について」『群馬文化』二五四号、一九九八

（4）拙稿「J・P・I・ヴィダルの見た高崎―富岡製糸場に勤務したフランス人医師の旅行記から―」『群馬文化』二五八号　一九九九
拙稿「ヴィダルの『江戸から新潟への旅』―フランス人医師の見た明治初年の日本」『武尊通信』八〇号　一九九九
拙稿「ヴィダルが記録した明治初期の群馬―フランス人医師の旅行記「江戸から新潟への旅」から―」『群馬文化』二六五号　二〇〇一
拙稿「ヴィダルが記録した明治初期の埼玉―フランス人医師の旅行記「江戸から新潟への旅」から―」『埼玉地方史』四五号　二〇〇一
拙稿「ヴィダルの上州温泉紀行―富岡製糸場勤務のフランス人医師による温泉調査―」『ぐんま史料研究』一七号　二〇〇一
拙稿「ヴィダルが記録した明治初期の新潟（上）―私立新潟病院に勤務したフランス人医師の旅行記から―」『新潟史学』四八号　二〇〇二
拙稿「ヴィダルが記録した明治初期の新潟（下）―私立新潟病院に勤務したフランス人医師の旅行記から―」『新潟史学』四九号　二〇〇二

（5）フランス人の旅行記には次のものが知られている。
野田良之・久野桂一郎共訳『ブスケ日本見聞記』一九七

七
市川慎一・榊原直文編訳『フランス人の幕末維新』一九九六
L・ド・ボーヴォワール（綾部友治郎訳）『ジャポン18 67年』一九八四
（6）澤護『お雇いフランス人の研究』一九九一
（7）富田仁『フランス語事始　村上英俊とその時代』一九八三
（8）ユネスコ東アジア文化研究センター編『資料御雇外国人』一九七五
（9）註（2）に前掲。
（10）富岡市教育委員会『富岡製糸場誌』上・下　一九七七
（11）横須賀海軍工廠編『横須賀海軍船廠史』（復刻）　一九一五
（12）なお、ヴィダルの没年月日については、これまでは武内博編『来日西洋人名辞典』（改訂版）一九九四に記載された一八八六年一月一日と考えてきたが、ヴィダルの墓所を調査した『新潟大学医学部七十五年史』の調査成果を今回は採用することにした。
（13）トゥールーズ物理学・自然科学学会の正式名は次の通りである。
La Société des sciences physiques et naturelles de Toulouse
（14）原題は次の通りである。
Une excursion aux eaux thermales des envion de Yokohama
（15）原題は次の通りである。
Voyage de Yeddo á Niigata (Japon)
（16）原題は次の通りである。
De Niigata á Yeddo (Japon)
（17）原題は次の通りである。
Exploration du volcan Asama-Yama, et des eaux minerales de Kousats, Kawara et Kami-Isobe, au Japon
（18）原題は次の通りである。
Note sur la flore de Japon
（19）松本純一『横浜にあったフランスの郵便局—幕末・明治の知らざらる一断面』一九九四
（20）パリ外国宣教会のエヴラール宣教師は一八六七年に来日し、函館・新潟・東京・横浜で活動を展開している。ヴィダルが新潟病院に迎えられた当時には、エヴラールも新潟を拠点に活動をしていて、ヴィダルの新潟病院招聘にエヴラールが仲介の労をとったことが知られている。
（21）註（15）に前掲。
（22）リュウは距離の単位で、一リュウは約四キロメートル。
（23）明治六年五月、ヴィダルが新潟に到着した時点で、新潟にはドイツ人二名、イギリス人一名、オランダ人一名がいたと記していて、ヴィダル自身とエヴラールのフランス人二名を加え、新潟には少なくとも六名の西洋人がいたことが解るが、その名前および職業については確認できていない。

(24) 『新潟大学医学部七十五年史』上編には、ヴィダルを囲む新潟病院関係者の記念写真が掲載されていて、これは新潟を離れる際に、撮影した記念写真の可能性が考えられる。
(25) 新潟県新潟市沼垂（ぬたり）。
(26) 新潟県新潟市松崎。
(27) 新潟県新発田市。
(28) 新潟県新発田市五十公野。
(29) 新潟県新発田市山内。
(30) アルジェリアの地域名。
(31) 新潟県新発田市上赤谷。
(32) 佐賀の乱のこと。
(33) ヴィダルは三川をサグラと記しているが、正式にはミカワの読みが正しい。
(34) テンポは天保銭に由来すると考えられ、ヴィダルは小銭の意味で使っている。
(35) 戊辰戦争における函館戦争。
(36) 函館戦争当時、エヴラールが負傷者の救済に当たったことは、これまで知られていなかった事実である。
(37) 新潟県東蒲原郡三川村綱木。
(38) 新潟県東蒲原郡三川村新谷。
(39) ヴィダルに同行した通訳は荒井宗懿であるが、もう一人の名前は判明していない。
(40) 新潟県東蒲原郡津川町。
(41) イギリス人鉱山技師エラスムス・ガワー。
(42) 新潟県東蒲原郡津川町花立。
(43) 前年六月、ヴィダルは新潟病院へ赴任する旅の途中、群馬県吾妻郡高山村中山で別種の水車を目にしている。
(44) 所在地不明。
(45) 新潟県東蒲原郡津川町野村。
(46) 新潟県東蒲原郡津川町八木山。
(47) 新潟県東蒲原郡津川町福取。
(48) 新潟県東蒲原郡津川町八ッ田。
(49) 福島県耶麻郡西会津町宝川。
(50) 山形・福島・新潟県境に所在する山。
(51) 福島県耶麻郡西会津町白坂。
(52) 福島県耶麻郡西会津町下野尻。
(53) 福島県耶麻郡西会津町上野尻。
(54) 福島県耶麻郡西会津町野沢。
(55) 所在地不明。
(56) 福島県河沼郡会津坂下町片門。
(57) 福島県河沼郡会津坂下町気多宮。
(58) 福島県河沼郡会津坂下町塔寺。
(59) 福島県河沼郡会津坂下町。
(60) 福島県会津若松市神指町高久。
(61) 福島県会津若松市。
(62) 巨石を積み上げた古代ギリシャの工法。
(63) 福島県会津若松市東山町。
(64) 拙稿「ヴィダルの箱根温泉郷・熱海温泉紀行―フランス人医師による明治五年の温泉調査」『温泉』七七〇・七七一号　二〇〇三
(65) 福島県会津若松市一箕町。

(66) 福島県会津若松市湊町赤井。
(67) 福島県会津若松市湊町原。
(68) 黒森峠のことと考えられる。
(69) 福島県郡山市湖南町赤津。
(70) 福島県郡山市湖南町福良。
(71) 福島県郡山市湖南町三代。
(72) 福島県岩瀬郡長沼町勢至堂。
(73) 所在地不明。
(74) 福島県岩瀬郡長沼町牧之内。
(75) 福島県岩瀬郡長沼町西小屋か？。
(76) 福島県西白河郡大信村町屋か？。
(77) 福島県白河市。
(78) 福島県白河市白坂。
(79) 栃木県那須郡那須町芦野。
(80) 栃木県黒磯市越堀。
(81) 栃木県黒磯市鍋掛。
(82) 栃木県大田原市。
(83) 所在地不明。
(84) 栃木県矢板市。
(85) 栃木県塩谷郡塩谷町玉生。
(86) 栃木県塩谷郡塩谷町船生。
(87) 栃木県塩谷郡塩谷町船場。
(88) 栃木県今市市。
(89) 栃木県日光市。
(90) 一ピエは約三十二センチである。
(91) 一プスは約二・五センチである。
(92) 男体山のことか？。
(93) 中禅寺湖。
(94) 栃木県今市市板橋。
(95) 栃木県鹿沼市。
(96) 栃木県栃木市。
(97) 栃木県下都賀郡大平町富田。
(98) パリ盆地の南部地方。
(99) 栃木県佐野市。
(100) 栃木県足利市梁田。
(101) 群馬県太田市。
(102) 群馬県新田郡新田町木崎。
(103) 群馬県佐波郡境町。
(104) 群馬県佐波郡玉村町五料。
(105) 群馬県佐波郡玉村町。
(106) 群馬県多野郡新町。
(107) 群馬県多野郡吉井町。
(108) 首長ポール・ブリュウナの助手をしていたルイ・ブルギニョンのことと考えられる。
(109) 機械掛として勤務していた石川正龍のことか？
(110) 拙稿「ヴィダルの浅間登山―「踏査―日本の浅間火山と草津・川原・上磯部鉱泉」から―」『群馬文化』二七四号二〇〇三
(111) 群馬県甘楽郡下仁田町。
(112) 中小坂鉄山。
(113) 佐渡鉱山に勤務していたエラスムス・ガワーが明治七年に着任した。

(114) 埼玉県本庄市。
(115) 埼玉県深谷市。
(116) 埼玉県熊谷市。
(117) 埼玉県鴻巣市。

付　記

本稿執筆後、ヴィダルの業績について、蒲原宏先生と清水陽人先生により詳細な研究が進められ、多数の論考があることの御教示を蒲原先生から受けた。本稿では両先生の先行研究を全く検討することなく、文章化を進めてしまっているが、今後さらに関係史料を総合的に検証し、幕末・明治期に来日したフランス人医師の活動について追及していきたいと思う。

（伊勢崎市教育委員会）